庭反Ⅱ遺跡

—昭和60年度緊急発掘調査報告書—

昭和61年3月

島根県

湖陵町教育委員会

分類番号
62. 3. 17
平 第 号

序　　文

本書は、湖陵町大字常楽寺の庭反Ⅱ遺跡を調査した昭和60年度の結果の報告であります。この調査の発端は、昭和60年度簸川南二期地区広域営農団地農道整備事業に伴なう工事現場に、昭和60年11月27日、土器片を発見、直ちに工事を中止し、工事予定地における埋蔵文化財の発掘調査の必要を認め、県教委からの実地視察を要請しました。

そもそもこの地帯は、大字東三部との境界にあり、かつての神西湖の南岸突端で、付近には多くの遺跡が知られており、いずれも弥生時代から古墳時代頃にかけての遺物が発見されているところです。

このような地域でもあるため、県教委としても、発掘調査の方法及び内容や手順等、綿密に協議を重ねられ、調査員並びに補助員の決定、これにかかる経費及び日程等が設定されました。

丁度、季節としても雪、雨等による調査の進行を心配しましたが、幸いその影響も少なく、予定以上に順調に調査が進められましたことを何よりの喜びとしております。

そしてここにその成果を多数の資料をそえて刊行するはこびとなりました。この成果はひとり町民のみならず、広く地域の歴史をひもとく資料の一端として皆様に御活用頂くことを願うものです。

なお、この調査に当り、県教育委員会文化課の御指導、ご配慮や出雲農林事務所並びに地元関係各位の御理解と協力に対し、また現場調査にあたられた皆様に感謝するものであります。

昭和61年3月

湖陵町教育委員会

教育長　福間堅伍

出雲市教育委員会
蔵書

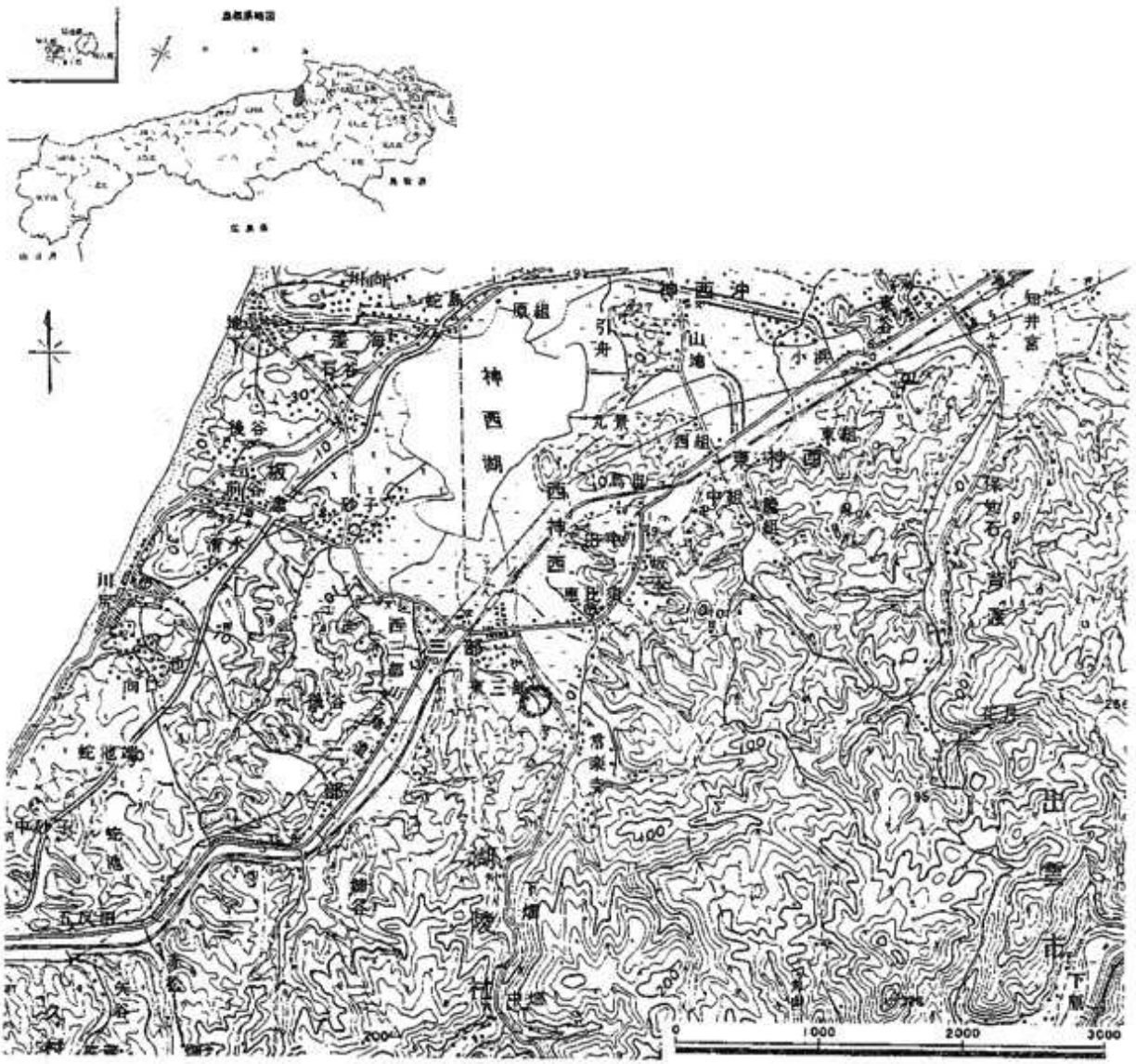


図1. 位　置　図

例　　言

1. 本書は、湖陵町教育委員会が、県営の昭和60年度簸川南２期地区広域営農団地農道整備事業施工中の発見にかかわる大字常楽寺所在の庭反Ⅱ遺跡について、出雲農林事務所から受託によって実施した昭和60年度の緊急発掘調査の成果報告である。

2. 調査は、昭和60年12月12日から昭和61年１月14日まで行い、その後、遺物の整理と成果のとりまとめを行った。

3. 調査体勢は次のとおりである。

調査主体者　湖陵町教育委員会　教育長　福間堅伍

調査指導者　藪岡法暲（島根県教育庁文化課課長補佐）　西尾克己（同第１係主事）

石井　悠（同第２係係長）

調　査　員　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）

調査補助員　大谷裕司　板垣　旭（島根県教育庁文化課派遣）　藤原友子（三刀屋町）

事　務　局　園山長俊（湖陵町教育委員会教育課長）　梶谷尚武（同社会教育係長）

4. 調査にあたって次の方々から援助・協力を得た。

江角俊郎（地元区長）　出雲農林事務所耕地第二課　橘建設　今岡工務店

5. 本書は、杉原・藤原・梶谷が編集し、本文はⅠを梶谷が、Ⅱ～Ⅴは杉原がそれぞれ執筆した。遺物の実測は主として大谷・板垣が行い、図版等の浄書は藤原が行った。

6. 挿図中の方位は調査時における磁針方位である。

7. 出土遺物は、湖陵町教育委員会で保管している。

目　　次

序　文　　湖陵町教育委員会　教育長　福間堅伍

例　言

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅲ　遺　　構 …… 4

調査の方法　トレンチ調査　全面発掘調査

Ⅳ　遺　　物 …… 17

出土状況について　弥生式土器　古式土師器

歴史時代の土師器　須恵器　石器

Ⅴ　む す び …… 38

図　表　目　次

図 1. 位置図

2. 遺跡分布図 …… 2

3. 付近の地形図 …… 3

4. トレンチの配置 …… 4

5. トレンチ実測図 …… 5

6. 遺構図 …… 7

7. 土器の散布状況 …… 8

8. 建物Ⅰ …… 9

9. 建物Ⅱ …… 10

10. 建物Ⅲ …… 10

11. 建物Ⅳ …… 11

12. 柱穴図 …… 11

13. 建物Ⅴ …… 14

14. 土壙（3N5） …… 15

15. 弥生式土器 …… 20

図16. 古式土師器(1) …… 22

17. 〃　(2) …… 23

18. 歴史時代の土師器 …… 25

19. 須恵器(1) …… 27

20. 〃　(2) …… 28

21. 〃　(3) …… 29

22. 〃　(4) …… 31

23. 石　　器 …… 32

表 1. 出土遺物集計表 …… 17

2. 土層位別土器片の新古と出土位置 …… 18

3. 1ピット当土器片の落ち込み数 …… 18

4. 土器落ち込みの多いピット一覧表 …… 19

5. 弥生式土器観察表 …… 33

6. 古式土師器観察表 …… 34

7. 歴史時代の土師器観察表 …… 36

Ⅰ．調査に至る経緯

湖陵町は、昭和26年に旧西浜村と江南村が合併して誕生した町で、太古には、神門の大海が現在の湖陵町から東に広がっていた。今回発掘調査を行った箇所は、神門の大海の南側の山にかかる所につき出した小高い丘陵であり、付近には庭反遺跡や雲部Ⅰ遺跡、Ⅱ遺跡とあり、又、横穴墓も発見されているところである。

今回の遺跡の発見は11月27日三原宏道氏によって簸川南広域営農団地農道整備事業の建設工事現場で土師器や須恵器の破片が採取され、町教委へ連絡があり、直ちに工事を差止め、事業の発注者である出雲農林事務所や県教委文化課と協議し、発掘調査の実施を決定した。

しかし、町教委には調査員がいなく、県教委に派遣を依頼したが人的余裕がなく、県の文化財保護指導委員・杉原清一氏の紹介を受け、無理なお願いをし、承諾をしていただき、12月12日より現地での発掘調査を開始した。

近くの遺跡との関連性や、先住の人々の生活の状態等、不明な部分が多くて、今回の調査に対する期待は大きいものがあった。本格的な発掘調査が行われるのは今回が初めてであり、町民の中にも見学を希望する者があったり、文化財に対する町民意識の昂揚を図る上で大変意義あることと注目されていた。

今回の調査が発掘に約1ヶ月間という短い期間でできた陰には、県教委の絶大なるご協力の賜ものと感謝している。

今後の調査に待つところも多いものと考えられるが、大字常楽寺、大字三部、大字二部にかけての遺跡の集中地の中でも大きな地位を占めるものと思われる。

なお、今回のこの調査が町文化教育発展の起爆材として、大きな注目を集めてきていることも意義あることである。

作業工程の概要は次のようである。

S60.12.12　調査着手、地形測量
13　耕作土を重機にて排除
14　発掘作業の準備
16　発掘作業開始
27　年末作業終り

S61.1.7　発掘作業開始
14　発掘作業終了
16　出土品の処理
〃　計測作業始める
3.8　出土遺物の調査を終了

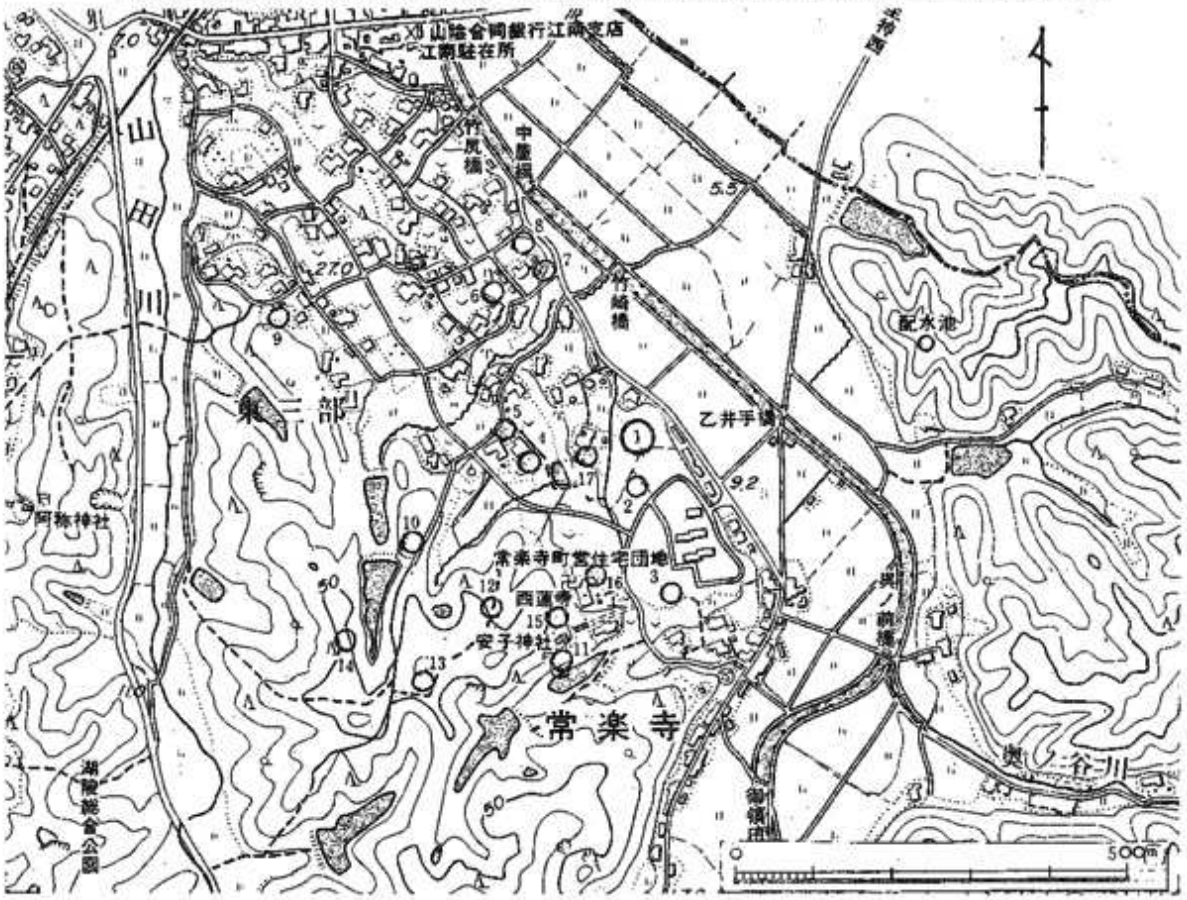
Ⅱ．遺跡の位置と環境

庭反Ⅱ遺跡は簸川郡湖陵町大字常楽寺地内の西端で大字東三部と境界を接する字庭反の水田に位置する。

北に向って張り出す低丘陵の突端部で、北下方はかつての神西湖を拓いた水田が広がっており、それからの比高は約11m を測る。南から流れ下った常楽寺川は、この水田地帯を通って北の神西湖へと注いでいる。

このように調査地点の一帯は、かつての神西湖南岸に当り、北からの低丘陵の張り出す第三紀層の台地状地形であり、弥生時代以降の遺跡が数多く散在し、湖陵町内では遺跡分布の最も濃密な地帯である。(図２参照)

該遺跡のすぐ南に接して庭反遺跡（島根県遺跡日録Ｓ50年では県№1360庭友遺跡とミス



1．庭反Ⅱ遺跡　6．竹崎遺跡　11．安子神社横穴群　16．(城郭？)
2．庭反遺跡　7．森の前２古墳　12．(古　墳)　17．(土居構え)
3．常楽寺遺跡　8．森の前古墳　13．高丸城跡
4．雲部Ⅱ遺跡　9．倉道古墳　14．(城　郭)
5．雲部Ⅰ遺跡　10．雲部古墳群　15．(横　穴)

図2．　遺跡分布図

プリントされている）があり、南東250mには町営住宅工事中に発見調査された常楽寺遺跡がある。西方約150mには雲部Ⅱ遺跡と雲部Ⅰ遺跡が並んで存在し、北東250mには竹崎遺跡がある。

これらは土師系土器や須恵器の破片が採取されたことによって知られ、常楽寺遺跡だけが発掘調査された。ともに弥生時代以降奈良・平安時代に至る間の遺物であり、発掘で検出した遺構は住居跡であった。

北西や西方には森ノ前古墳、雲部古墳群、倉道古墳など古墳が点在している。なおこれらはいずれも未調査のため詳細は不明である。西蓮寺裏の丘頂部はやや大型の古い古墳のようであるが未確認である。安子神社の脇には横穴群があり、昭和39年の水害による崖崩れで須恵器や土頭太刀等が出土した。このほか常楽寺地内には布子谷や板高にも横穴があったが今日では消滅しているとのことである。

またこの台地状地形を囲むように、南方丘陵の高所には中世の砦が設けられており、高丸城跡と呼ばれ大字二部・姉谷の要害山城跡との関連も考えるべきものである。主な郭は「高丸」の山頂部とその北側の平坦面、谷を挟んで西側の大山神社の祠のある頂部などである。北麓にあたる東二部竹崎や雲部には五輪塔の残欠の群をみることができる。地名にも関連するとみられる「馬場」「狩山」「竹（館）崎」「〇〇垣内」が散在し、家号「土居」(江角氏宅)は土居構えの様相が窺われ、土豪の拠点の一つであったとみられる。

この地帯は「出雲国風土記」に滑狭郷に属し、しかもほぼその中心地点に相当する。そして石見国への主要道が此所を通っており、これは今日での旧国道にほぼ一致している。

以上の諸点から該地は古代以降、主要往還路の位置としても盛況であったことが窺われる地帯である。

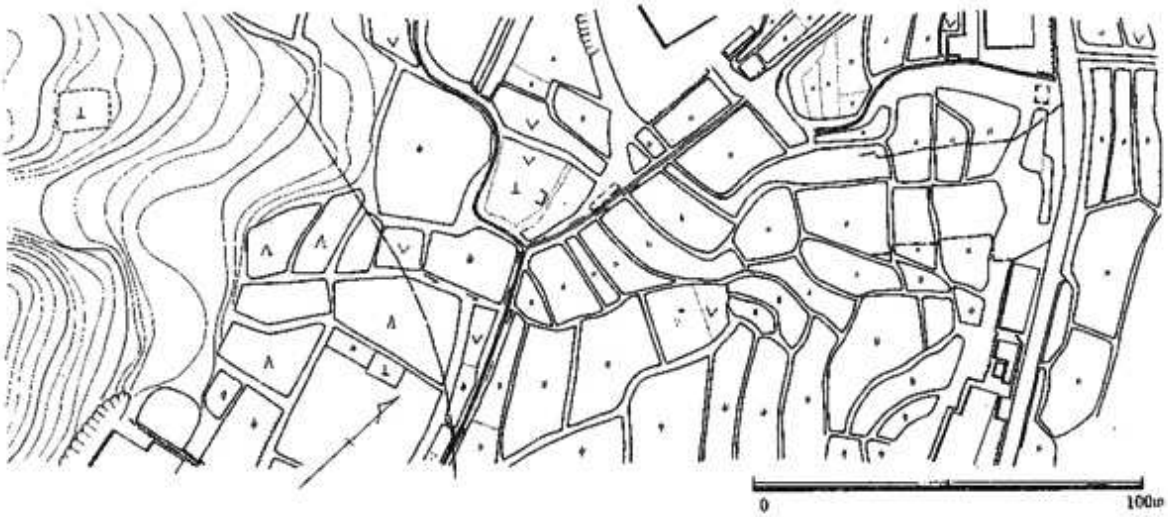


図3.　付近の地形図

Ⅲ. 遺　　構

1. 調査の方法

発掘調査は施工区域に限定した。県道から南西に丘陵方面への進入部分の水田であり、ほぼ幅20m、長さ35mの範囲である。

作業は先ず区域内の地形を平板測量し、耕作土とその直下の盛土部分には遺物を全く含まないことから、これを重機によって排除し、旧地表土以下について調査を行った。

しかし、それまでの工事によって北～北西部の一部は破損しており、結局調査は残った400㎡余りであった。

施工設計に基づいて中心線から2mの平行線を調査中心線とし、便宜上山手側を西（W）下手側を東（E）と呼び、横断方向をそれぞれ南（S）、北（N）と呼称した。これによってN0～N6、S0～S6区に区画し、トレンチは縦1条、横6条とした。(図4)

このトレンチ掘りによって、遺物を包含する黒い旧表土の下は地山の黄色粘質土であり、この地山には多数の柱～杭穴が散在することを確認した。この成果を踏まえて区毎に旧表土を除いて全面地山面を出して柱穴の配列を検討した。

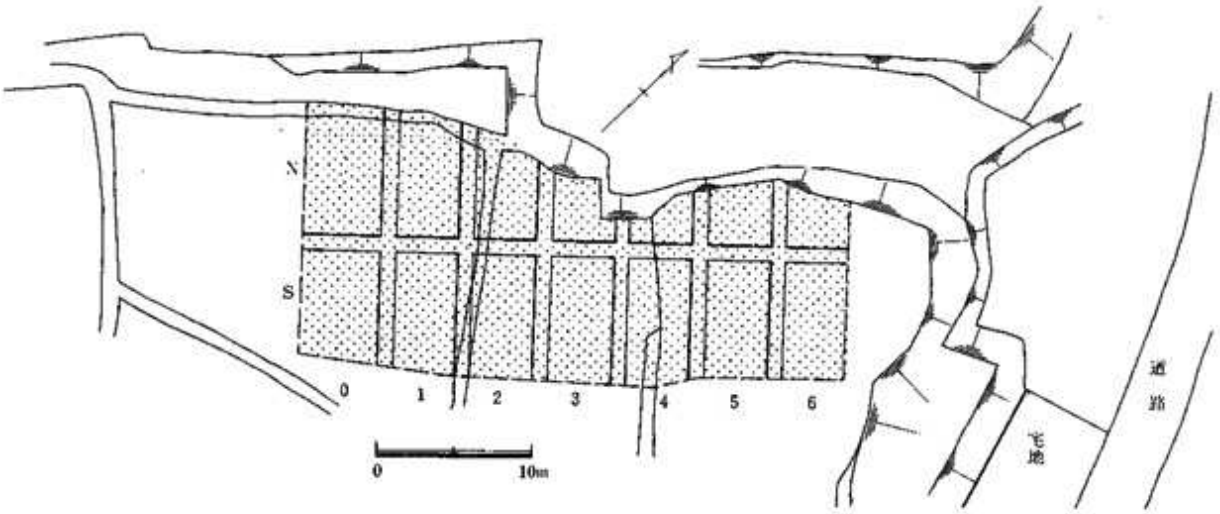


図4. トレンチの配置

2. トレンチ調査（図5）

1）縦トレンチで見ると、0区～6区の35m間で地山の高低差が1.3mの極く緩斜面であり、この上に厚さ20～30cmの旧表土が被っていた。しかし高位の0区は水田を拓くに際し旧表土はほとんどが削り去られている。その他にも部分的に旧表土の上面の失なわれたところがあった。

この旧表土層が、弥生後期以降中世に至るまでの土器片等が検出される遺物包含層で

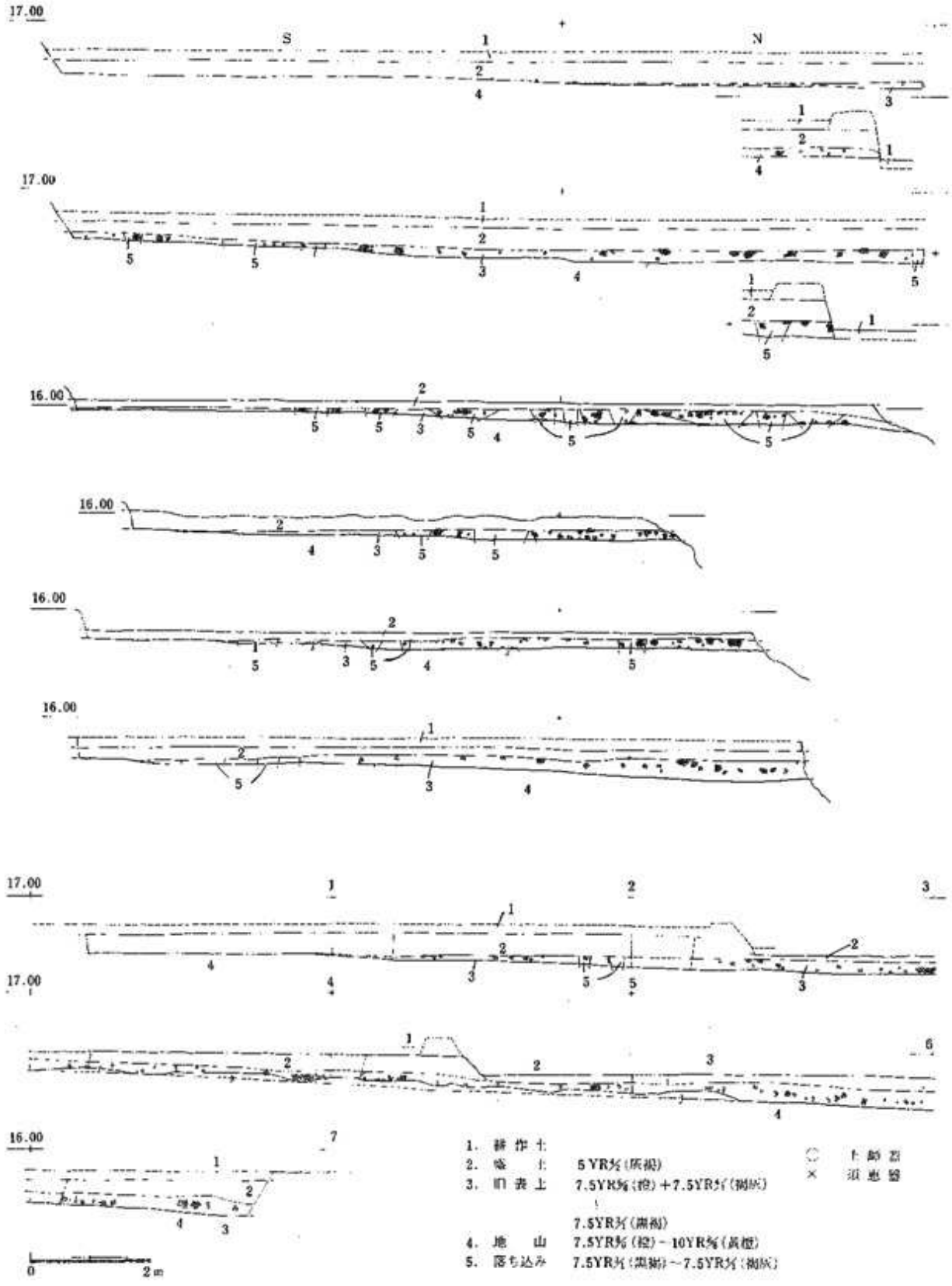

17.00
S
N
16.00
0
2m
1. 耕作土
2. 盛土 5YR5/2(灰褐)
3. 旧表土 7.5YR5/6(橙)+7.5YR5/4(褐灰)
7.5YR3/4(黒褐)
4. 地山 7.5YR5/6(橙)-10YR5/6(黄橙)
5. 落ち込み 7.5YR3/4(黒褐)~7.5YR5/4(褐灰)
○ 土師器
× 須恵器

図5. トレンチ実測図

ある。特に低位である4～6区あたりには、古墳時代以降の遺物がやや多い傾向にあり、破片もやや大きく高位区域からの移動も思われる出土状況であった。

また遺物の包含状況をみると、旧表土の上半～上面部分には歴史時代に関る遺物が、下半～下面にはより古い時代の遺物が多いことが認められた。

2）横断方向についてみると、南側は漸次高位となり北へは緩く下降し、調査区の外れたところで小さな谷地形へ落下する地形である。遺物を含む旧表土は水田開拓に伴って削られた部位があり、南に薄く北に厚い層分布となっている。特に0S・0N区及び2S、3S区の南寄りには遺存しなかった。

柱～杭穴の落ち込みは、旧表土上面においてその輪郭が認められるものもあったが、大部分は黒い旧表土を除いて黄色地山面に及んではじめて認められるもので、数としてはこれがほとんどであった。低位の4～6区においては旧表土の下面と地山との境界が不明瞭であり、旧表土の下方滲透が著しい。

このような遺物の包含状況と柱～杭ピットの有様をふまえて区毎に全面発掘を行った。

3. 全面発掘調査

調査区の全面について包含する土器片を採取しながら旧表土を除去した。

土器片の分布は概ね包含層の厚さに準じて3～5区に多く、しかもN区よりS区に多い傾向が認められた（図7）。詳細は遺物の項で記述する。

落ち込みの認められるのは、旧表土上面からのものと地山面まで削り出してはじめて認められるものとがある。前者は少数であり落ち込み土は焼土や木炭それに須恵器や土師質土器の破片が混入している。これに対して後者は黒色～黒褐色の土が入っており、これに細片の土師系土器片がわずかに混入する場合がある。これらの状況から落ち込み（ピット）には少なくとも二種があり、前者の場合は旧地表上から穿ったもので、抜取後の穴に故意に混合土を投入したものとみられ、後者はより古い段階のもので旧表土層の中間位置あたりから穿ったピットであると判断された。このほか、不定形をなす落ち込みもあり、樹株跡とみられるものもあった。

これらの落ち込みはすべて裁ち割り断面について観察し、さらに必要なものは全掘を行って調査した。

この結果、柱穴～杭穴と判断されるピットは図6のように0S～4S、1N、2Nの各区に特に集中しており、調査の全区域での落ち込み総数302を数えた。その中で明らかに柱穴と判断したのは約半分の164であり、特に1S、1N、2S区に多く分布した。

この柱穴としたピットの落ち込み埋土についてみると前述したように旧表土上面から穿

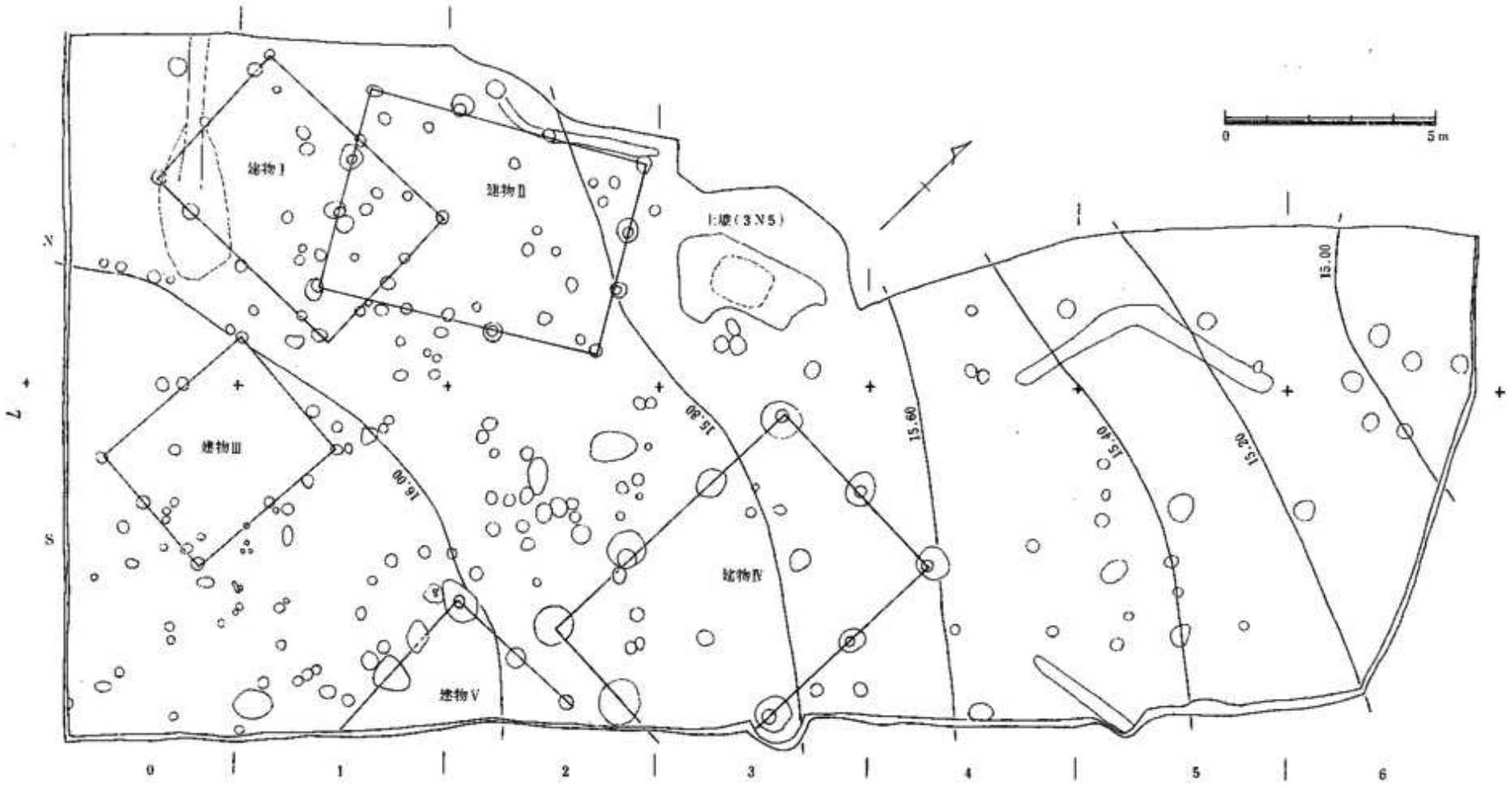

建物Ⅰ
建物Ⅱ
土壙(3N5)
建物Ⅲ
建物Ⅳ
建物Ⅴ
15.00
15.20
15.40
15.60
15.80
16.00
0
5m
N
S
0
1
2
3
4
5
6

図6. 遺　構　図

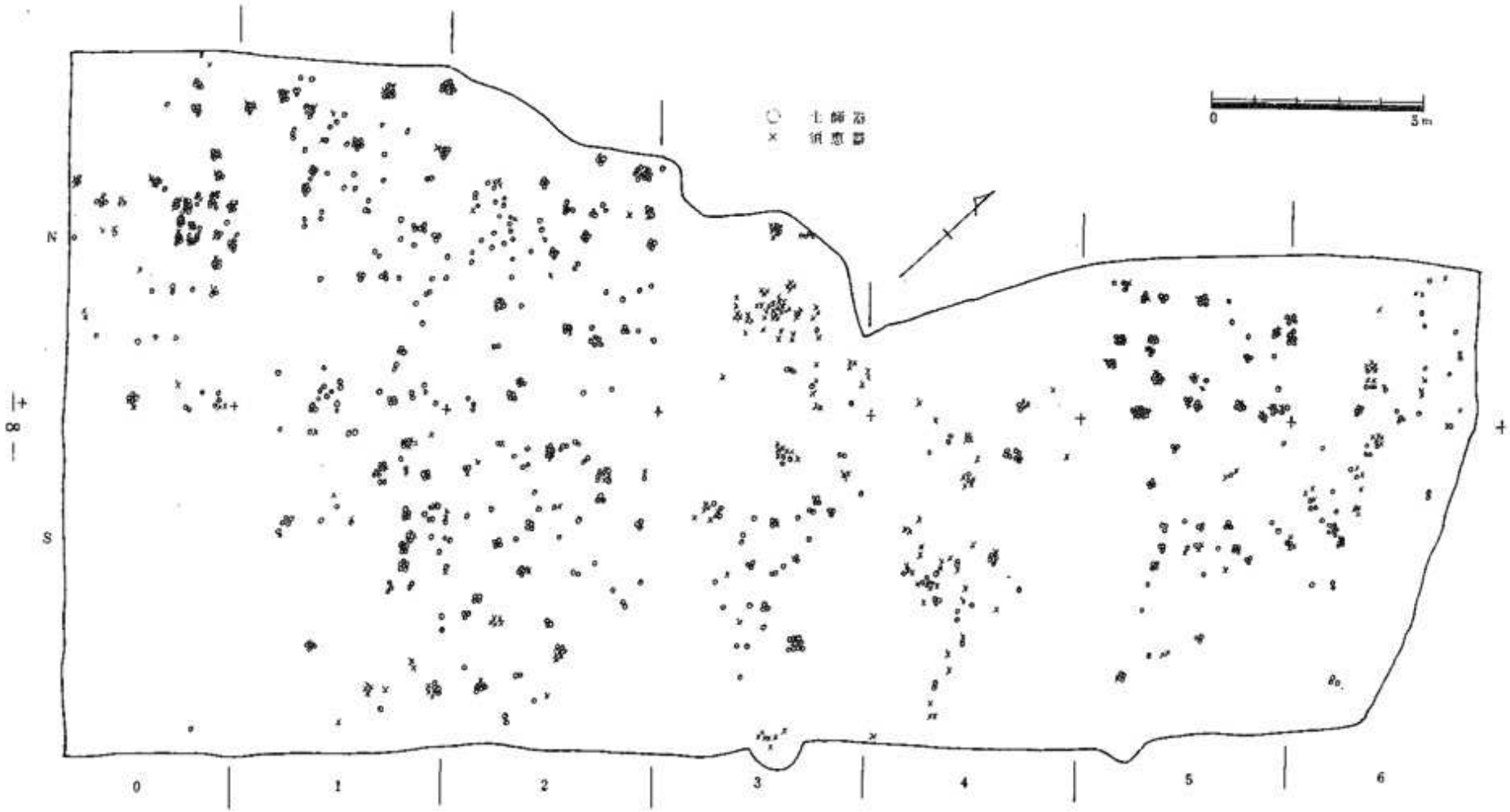


図7. 土器の散布状況

った柱穴には焼土や土器片等が多く混入又は投入されており、ピット径も大型であり、主に2S・3S区にみられ、新しい段階の建物が推定された。一方、1S、1N、2N区などに多い黒色土の詰った柱穴は、古式土師器や弥生式土器の細片をわずかに混入しており、新段階の土師系土器や須恵器はほとんど含んでいないことから、古段階の建物であったと考えられるが、そのプランは重複しており3棟を判別し得た。

1）建物Ⅰ（図8）

調査区域の西端にあり、桁行5.6～5.8m 2間×梁間4.0～4.1m 2間、桁行方向N85°Wで原地形の等高線にほぼ平行するプランの建物である。各柱穴はやや不揃いであるが概ね底径25cm前後、深さは水準（標高17.00m）からの下りで130cm前後で、おそらく旧表土の上から掘り込まれた柱穴である。この柱穴内への落ち込み土は濃い灰褐色で旧表土と地山土の溶け合った土のようで、これは柱を抜き去ったあと人為的に埋め戻されたものではなく、表土が流入したものとみられる。

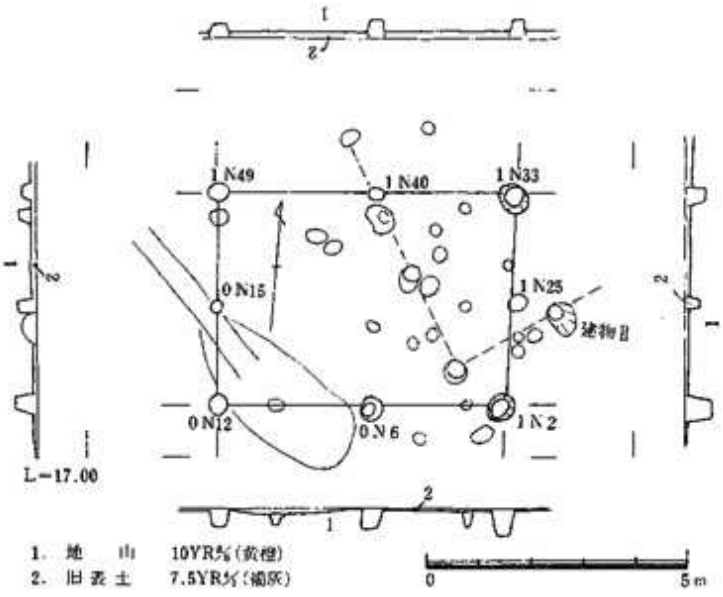


図8. 建　物　Ⅰ

柱穴はすべてがほぼ直線的に円型に掘り込まれており、コーナー部がやや大きく、間柱がやや小さくて浅い。なおこの柱穴に落ち込んでいた土には若干の土器片が混入しているものがあり、0N12、0N6に土師質系土器と須恵器片が認められた。

柱間隔についてみると、梁方向は1.75～2.25mで2.25mを基準にするものとみられ、桁行方向では2.60～3.00mで平均は2.85mとなる。しかしこれらは個々に差異があり、柱もやや小径とみられ全形も整っていないことなどから、やや粗略な建物であったと思われる。

2）建物Ⅱ（図9）

建物Ⅰと一部重複しており、6.6～6.8（3間）×4.7～4.8m（3間）の比較的大きい建物である。桁行はほぼ地勢に沿っておりN58°Eのほぼ東西方向である。

地山面での等高線に対しては斜めの配置となり、建物の南と北の隅では地山地盤高で

約20cmの差があるが建物Ⅰと同様旧表土から柱穴が穿たれていたものとみられ、柱穴内は旧表土と同質のよりやや濃い黒色土が流れ込んでいた。

柱穴は底径25～30cmで直線的に円形の掘り込みで四隅の柱穴はやや深く、基準高からの深さ約150～180cmで低位のものが深く、間柱は120～180cmとまちまちである。柱間隔についてみると桁行方向では2.15～2.50mで多くは2.15～2.20mであり、梁方向では1.20～2.00mで主に1.4mと1.65mの二種がある。

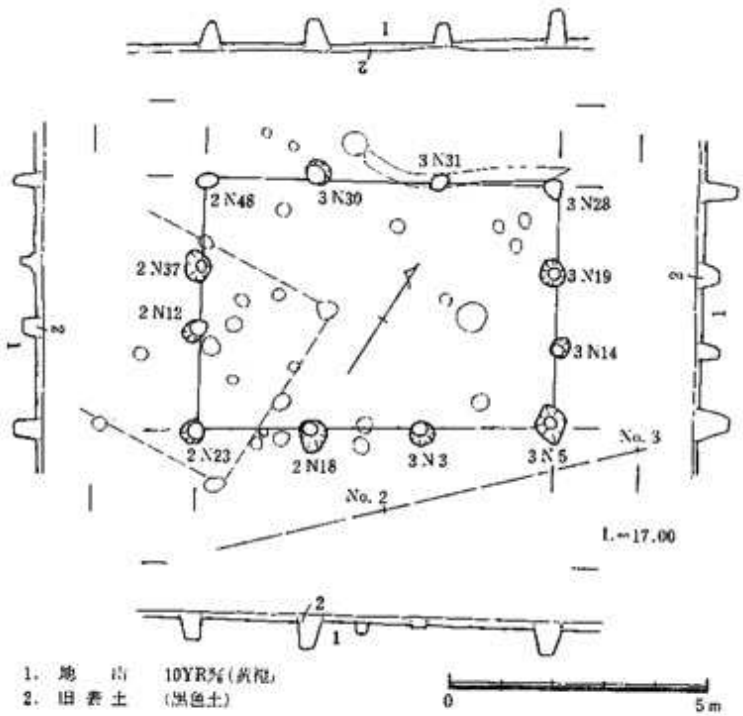


図9. 建　物　Ⅱ

プランはほとんど整形でやや大きい建物である。

この建物の柱穴には土器片の流入落ち込みしたものが若干認められる。弥生後期～古墳時代前半の土師系の細片のみで須恵器片は認められない。

3）建物Ⅲ（図10）

この建物は4.3m（2間）×3.6～3.7m（2間）と比較的小さく、柱穴も底径20cm位の小さいものである。

地山地勢に直交する方向に建てたもので、地山地盤の高低差は約10cmとほとんど平坦に近い部分であり、桁行方向はN2°Eを測り、北に合わせたプランであるとみられる。

柱穴の底径は約20cmで細く、特に間柱には細く浅いもの（0S37）もある。

柱間隔は桁行方向側は2.2～2.1mに対し、西側は1.55mと2.50mと異なり、梁方向も

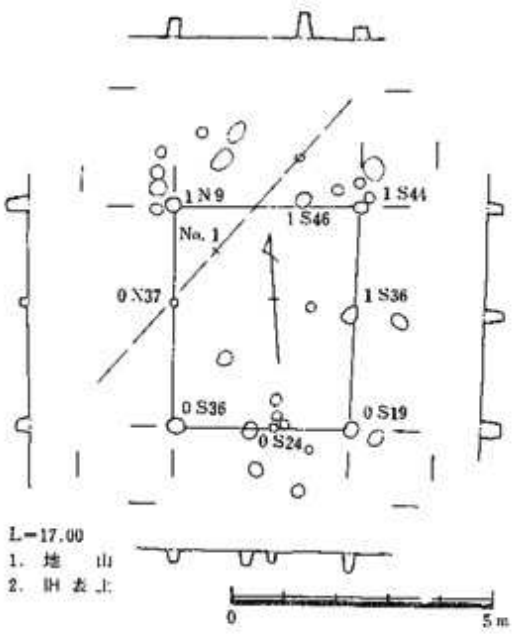


図10. 建　物　Ⅲ

南側は1.85mと1.50mに対し、北側2.40mと1.15mとこれも大幅に差がある。この北側及び西側にみられる柱間の狭い部分は出入口でででもあろうか。

この建物の柱穴には建物Ⅰの場合と同じような灰褐色の土が流入している。土器片等の混入は認められなかった。

4）建物Ⅳ（図11）

調査区内で最もしっかりした建物の跡である。桁行7.4～7.5m（3間）×梁行5.0m（2間）で中央に束柱のある建物である。

この建物は北東側に傾斜する地形で高低差は35cmの範囲に斜行する方向に建てられていて、桁行方向はN 1°40″Eである。

この建物の柱穴は格別で、直径約90cmの極大型で地山に深さ約40cmの掘り方であり、中心部に柱根を抜除した部分の黒褐色土の落ち込み部があり、そのほかは旧表土に地山の黄色粘質土や木炭の細末の混った土で埋められており、これには須恵器や丹塗り土師器片が含まれていた。またこれらの上部に土器片（図17—24、図18—6、11、17、18、図19—8、24、図20—32、33、41、42、43、図21—54）の集中する柱穴ピットもあった。

柱間隔についてみると桁行方向は2.20～2.65mで平

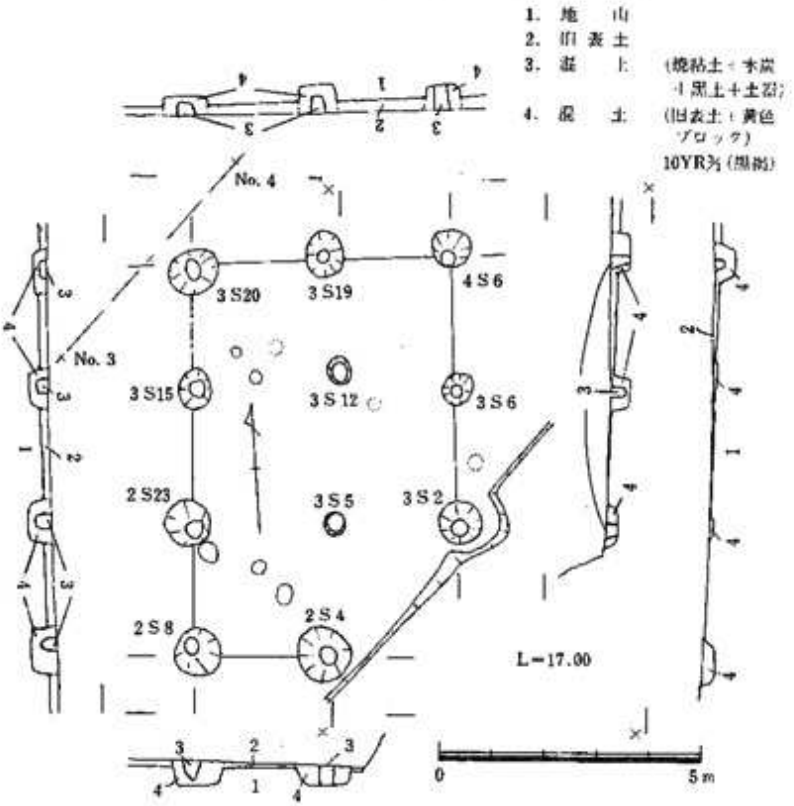


図11. 建物Ⅳ

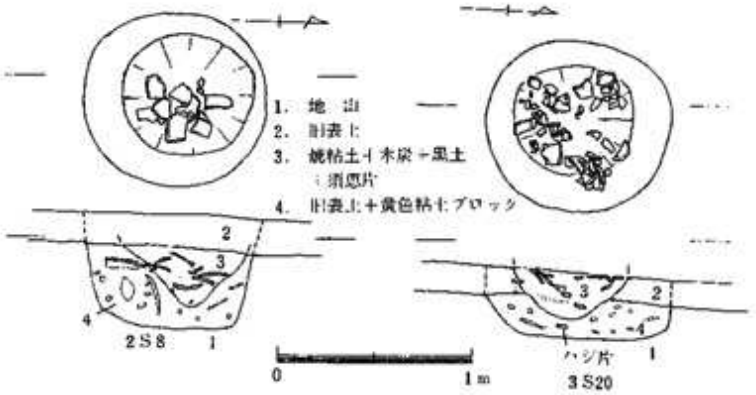


図12. 柱穴図

均2.50m、梁行方向は2.40～2.60mで平均は2.50mとなる。また、各外柱の交点にあたる建物中央位置にも３Ｓ５、３Ｓ12の柱穴があり、外柱のそれより浅く柱根の太さ程度の直径である。平面配置からみると総柱造りのようであるが柱穴の状況から、この二つの柱穴は束柱とみるのが適当と思われる。とすると、この建物はⅠ～Ⅲとは異なった構造のもので、例えば床は板張りで床下が高い、などが想像される。

次に主な柱穴についてみる。

①２Ｓ８：建物の南西隅にあたるもので直径90cm、地山への深さ40cmの平らな底の掘り方で、中央部分の柱根のあったとみられる部分は中央部上面に須恵大甕胴部破片（図19—25）がまとまって堆積し、焼粘土、木炭、黒土の混り合った土に須恵器の破片を含んでいる。そのほか掘り方全部は地山土の黄色粘土塊がブロック状に入った灰褐色土（旧表土質のもの）であり、土器片等は見当らない。また柱根の下には石等は認められなかった。この柱穴は上面にあった須恵器片の散布の状況や埋土のレベル等からみて、旧表土の上面から穿ったものと判断されるが、現況では開田に伴う削平で旧地表面が何程の位置にあたるかは不明である。しかし現況においても旧表土の厚さ約15cmを測り得る。

②３Ｓ２：地山に直径95cm、深さ25cm、円形の掘り方で、柱心位置はやや南へ偏るものであった。この柱は南東隅から２本目の柱であり、深さの浅いのは隅角部でないことによるのであろうか。掘り方内の外周部分は上記同様に黒褐～灰褐色土に地山の黄色粘質土が層をなすブロック状に入ったものであり、柱根部位は焼粘土や木炭片の混合した土が詰っていた。この柱根位置の上方（ピット上面）には、地山面より上方から須恵大甕の大破片等（図22—57、図19—１、７、図20—42）が集中しており、投入した状況を示していた。

③４Ｓ６：建物の北東隅の柱穴で70×75cmのほぼ円形の掘り方で、地山に深さ20～23cmの底の平らなピットである。柱根位置は南側に偏っており、地山黄色粘土がブロック状に混った黒褐色土で詰っていて、柱根部分は焼土や木炭末の混った土であった。この埋土は地山より約10cm高い旧表土中から認められ、上半部分には特に須恵器の破片が密集して投入されていた。ピット底には礫などは認められなかった。

④３Ｓ19：建物北側中央の柱穴である。90×70cmの南北にやや長い円形の掘り方で、地山への深さは約35cmである。ピット中央部分に円形に焼土や木炭末を含む土が落ち込み、これには須恵器や土師質土器片（図18—６）を多く含んでいた。その周囲や底面付近には地山黄色粘質土がブロック状に混った黒褐色土で埋められていた。このピットも地山より上方から埋土が認められ、旧表土中から掘り込まれており、土器片等は投入されたものとみられる。

⑤3 S20：建物北西隅の柱穴である。85×95cmのほぼ円形で地山面下約20cmの皿型の掘り方である。ピット中央部分の地山上約20cmあたりから焼土や木炭の混った土と須恵器片や灰釉陶片（図19－8、24、図20－33、41）が多量に投入されており、その周囲部分は地山黄色粘土のブロック状に混った土で詰められている。やはり旧表土の上面近くから穿ったピットである。なお灰釉陶片は隣接の3 S15ピットのものと接合復元し得た（図21－50）。

⑥3 S15：建物西側中間柱で、掘り方は80×62cmで他よりわずかに小さく、地山への深さ約40cmの掘り込みである。ほぼ中央の位置に柱があり、地山上面レベルあたりに須恵器の大破片（図20—43、図21—54）や灰釉陶片（図21—50）が集中投入されていた。この灰釉陶片は上記のように隣接の3 S20のものと同一個体であり接合復元し得たものである。ピットに詰っている土の状況は上記一連のものと相を一にするものである。

⑦2 S23：上記と同じく建物西側中間柱で掘り方は90×90cm円形で地山への深さ約40cm、ピットの中央から北へ偏って抜き取られた柱根部位が明瞭である。柱痕の状況から直径22～25cmの円柱であったことが知れる。この柱穴には下端に直径7cmの礫石が置かれ、柱痕はこの上端から認められることから柱下に詰めた石材であった。このようにピット底に石を敷いた、又は詰めたピットは他になく、柱高を調節するためのものであったかとも考えられる。このピット内の落ち込み土には土師質土器の細片が多くみられた。

このほか南側中央の2 S 4や、東側中間柱である3 S 6などもほぼ同様でピットのほぼ中央に柱痕があり、そこには焼土や木炭の混った土が投入された状態で詰っており、その周囲は地山黄色粘質土が塊状に混った土で埋められたものである。

このように建物Ⅳの外まわりの柱はすべて同一趣向で、ピットは大きく掘り、底には敷石などをせず直接柱を立て、その周囲を掘り上げた土（表土と地山土の混ったもの）で埋めていたものである。のちに柱を抜き去ったあとの穴には焼土や木炭末とともに、多量の須恵器や土師質土器片を投入して埋めている。

⑧3 S 5、3 S12：この建物の中央にあり、各外柱を結ぶ線上の交点にそれぞれ位置する。ピットは直径35～50cmの円で、わずかに地山面に達する程度に浅いものである。柱の太さは不明確であるが、外囲の柱列とは全く異なり、荷重の小さいものであったと判断されることから床下の束柱であったと思われる。埋められていた土は、焼土、木炭の混った土で、その上面には主に土師質土器の破片が多く認められた。

以上のように建物Ⅳの柱穴はⅠ～Ⅲの建物とは全く様相が異なり、規模も大きく、規格性も正しい。また人為的に埋め戻された土からは多くの土器片が採取された。

5）建物Ⅴ（図13）

建物Ⅴは建物Ⅳに1mの間隔で接して位置するプランである。建物の北西の隅角部の一部分のみを検出したもので、2S10～1S9が桁行方向とみられ柱間隔は2.30m方位N2°Wを測り、建物Ⅵとの差は約4°である。2S10—2S2—2S3の2間が梁であろう。この柱間隔は1.65～1.70mである。

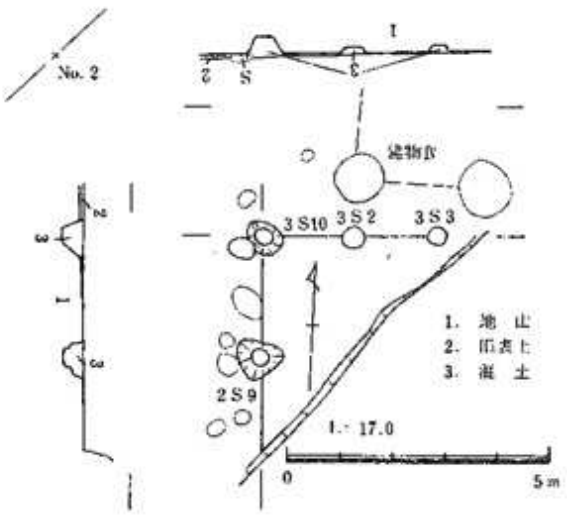


図13. 建　物　Ⅴ

柱穴2S10は建物の北西隅であり、70×110cm、深さ35cmのピットで、その西側を約40cmの石で詰めている。柱根位置は東側に偏っており、焼土や木炭末の混った土で埋められている。柱の太さは約20～25cmと思われる。このピット内からは土師質土器、須恵器片が若干検出され、石器（石匙図23—1）も採取された。

柱穴1S9は直径約70cmのやや三角形気味のピットで、地山へ20cm掘ったところから二段掘りしてあり、地山からの深さ35cmの底面は直径約25cmの円形であった。埋められていた土は上記同様の焼土・木炭混合土で、混入していた遺物は古式土師器片や土師質土器、須恵器（図19—21）の破片であった。

梁方向の2S2・2S3は直径約35cmの円形で、地山への深さ約12cmの浅いピットで、柱根よりやや大きい程度のものである。このいずれもが同様に焼土・木炭混りの土が詰っていた。土器片の混入は2S3にはほとんどなく、2S2には古式土師器とみられる細片が若干認められた。しかしこれはピットの時期とは関係せず、旧表土中に包含していたものとみられる。

ピットに落ち込んでいた土は、建物Ⅵと全く同じであったが、ピットの形態は異なったものである。

全プランは未調査部分へかかっており、不明な点が多い。一応2間以上×2間の掘立建物としておく。

6）その他の柱穴について

建物プランの判明したものについては記述したが、そのほかに大小100個以上のプラン不明の柱穴とみられるピットが散在した（図6）。

これらのピットの落ち込み土には、旧表土と同質の黒色（A）～黒褐色土（B）であ

ずかに土師系土器の細片を含んだものと、焼土や木炭細片それに土師質土器や須恵器等の細片を若干含む土（C）のものとの二者がある。

またピットの掘り方では円筒形・二段掘り円形・縁心擂鉢形に大別され、それぞれに大小がある。特に円筒形のものは大小の差が大きく、概ね中～小の部類であるのに対し二段掘りのものは概ね大型のピットであった。

またピットの形状と落ち込み土の種別とは相関せず、プランも判然としなかった。

落ち込み土（A）のものの中には弥生～古式土師器片のみのものもあり、また新しい土師質土器を含むものもあるなど、その時期幅は大きいとみられる。

これに対し焼土・木炭等を含む（C）の土のものは限定された時期のもので比較的新しい土師質土器の混入が時期を示唆しているとみられる。

7）土　壙（３Ｎ５）（図14）

３N区に大形の落ち込み部があり、これを３Ｎ５とした。

ほぼ東西方向を長軸とし、上端で幅1.3m、長さ3.0m、やや菱形に掘り、地山下約15cmから1.0×1.3m長方形を二段掘りしている。このピットの底面は平坦でなくやや凹している。

この付近では旧表土は地山面上約15～18cmあり、この大型ピットの上にあたる位置の旧表土上面には須恵大甕１個体分の胴部（図22—２）約90片が潰れた状態で出土した。

ピット内の土は表土と同じ黒色土の単層で種々の土器片を包含し散在した。弥生式土器～古式土師器片12、須恵器片７、土師質土器片17、区分不明の土師系破片32片を数える。ほとんどが細片であった。これらの中には弥生式土器の口縁部片や、須恵質擂鉢片（図21—55）、白色石製の紡錘車（図18—21）土師質土器の注口部（図18—27）

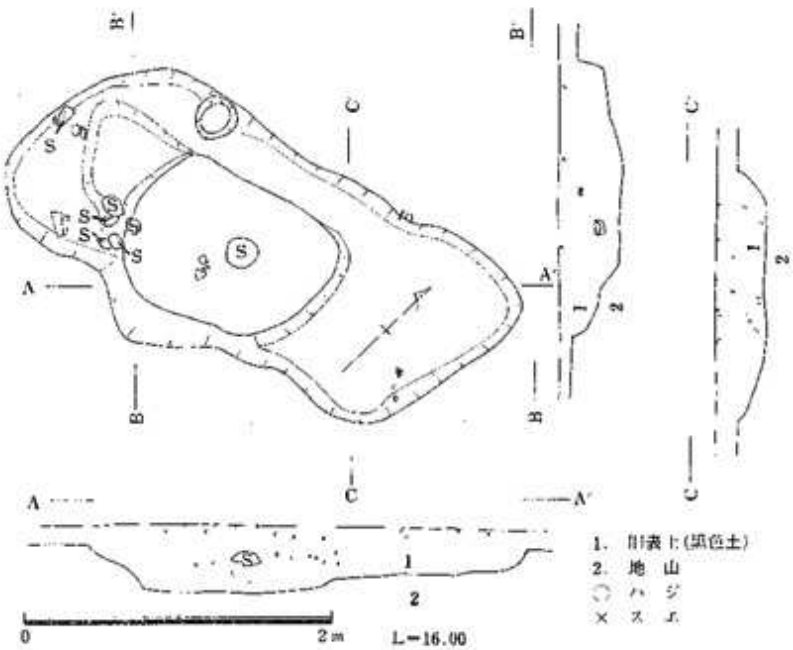


図14.　土　　壙（３Ｎ５）

などがみられる。このほかピット底の東寄りに直径約25cmやや偏平な石が置かれ、二段掘り南西肩部には拳大より少し大きい石が5個まとまって置かれ、上記大礫の直下にも約15cmと20cmのやや偏平な石が置かれていた。ほかに埋納した遺物は検出されなかった。

これらの状況から素掘りの土壙墓（小さな標石をおいたもの）であったと思われる。

4N区から5N区へかけて〝く〟字状のもの、5S区南端～未発掘部へかかるもの、2N区北端から工事によって削られた部分へ続くもの、及び0N区の中央から北西へ延びるものの合計4本の溝状構造が検出された。いずれも断面逆台形で、底幅約15cm程であり、旧表土と同じ黒褐色～黒色土で埋まっていた。この埋土には若干の土器片が含まれることは旧表土層と同様であり、特別の遺物は存在しなかった。0N区以外の3つの場合はいずれも傾斜があり、排水溝とも考えられるが、0N区のものはほとんど水平に近いものであった。

またこれからはいずれも建物プランとの関係は認められず、用途不明である。

Ⅳ. 遺　物

1. 出土状況について

採取した遺物はほとんどが土器片であり、石器とその剥片等はわずかに数点を数える。

遺物の総計は4,589片で、そのうち土器以外のものは石器・剥片・鉄滓が合計12点である。土器では弥生後期～古墳時代の古式土師器片586片、歴史時代の土師器613片、そのいずれとも判断し難い土師器細片2,204片で合計3,403片が土師系であり、須恵器片（灰釉陶も含む）は1,174片であった。

表1. 出土遺物集計表

区	遺物	型	表面	黒色土中	ピット内	小計
0N	土師器	古		44	6	50
		新			2	2
		不明		143	7	150
		計		187	15	202
	須恵器		3	39	8	50
	その他					—
	小計		3	226	23	252
0S	土師器	古	2			2
		新	1		3	4
		不明	10		4	14
		計	13		7	20
	須恵器		4		3	7
	その他					—
	小計		17		10	27
1N	土師器	古	4	50	22	76
		新		6	13	19
		不明	6	129	30	165
		計	10	185	65	260
	須恵器		5	19	6	30
	その他					—
	小計		15	204	71	290
1S	土師器	古	8	14	18	40
		新		2	10	12
		不明	15	29	10	54
		計	23	45	38	106
	須恵器		14	13	12	39
	その他			1		1
	小計		37	59	50	146
2N	土師器	古	4	42	67	113
		新		19	1	20
		不明	12	161	7	180
		計	16	222	75	313
	須恵器		11	14	6	31
	その他			1		1
	小計		27	237	81	345
2S	土師器	古		25	43	68
		新	1	15	65	81
		不明	22	125	71	218
		計	23	165	179	367
	須恵器		15	40	59	114
	その他				1	1
	小計		38	205	239	482
3N	土師器	古	2	20	17	39
		新	12	57	27	96
		不明	40	157	55	252
		計	54	234	99	387
	須恵器		130	67	24	221
	その他			1		1
	小計		184	302	123	609
3S	土師器	古	5	12	44	61
		新	4	2	177	183
		不明	8	67	186	261
		計	17	81	407	505
	須恵器		8	9	232	249
	その他				1	1
	小計		25	90	640	755
4N	土師器	古	1	19		20
		新	3	21		24
		不明	2	96		98
		計	6	136		142
	須恵器		5	33		38
	その他		1			1
	小計		12	169		181
4S	土師器	古	6	23	1	30
		新	7	9	11	27
		不明	29	95	11	135
		計	42	127	23	192
	須恵器		63	18	14	95
	その他					—
	小計		105	145	37	287
5N	土師器	古	3	21	5	29
		新	7	72		79
		不明	7	172	14	193
		計	17	265	19	301
	須恵器		16	52	2	70
	その他				1	1
	小計		33	317	22	372
5S	土師器	古		15	7	22
		新	6	5	11	22
		不明	11	106	36	153
		計	17	126	54	197
	須恵器		9	24	14	47
	その他			1		1
	小計		26	151	68	245
6N	土師器	古	1	13		14
		新		6		6
		不明	10	127		137
		計	11	146		157
	須恵器		14	32		46
	その他					—
	小計		25	178	—	203
6S	土師器	古	1	3	3	7
		新	1	9		10
		不明	11	55	7	73
		計	13	67	10	90
	須恵器		15	20		35
	その他					—
	小計		28	87	10	125
合計	土師器	古	50	303	233	586
		新	69	224	320	613
		不明	294	1,472	438	2,204
		計	413	1,999	991	3,403
	須恵器		413	381	380	1,174
	その他		5	4	3	12
	小計		723	2,370	1,374	4,589

※黒色土中一括　ハジ(古)15、(新)28、不明121、須恵器102、その他4、小計270片　　総数 4,589片

表2.　出土層位別土器片の新古と出土位置（構成比：%）

区		S							N						
		0	1	2	3	4	5	6	0	1	2	3	4	5	6
表	須+新	30	38	42	48	67	58	57	96	34	41	77	62	70	56
	古	12	22	5	20	6	4	4	4	27	15	4	9	9	4
面	不明	58	40	53	32	27	38	39	0	39	44	19	29	21	40
黒色土中	須+新	0	26	28	12	18	19	22	17	12	14	40	32	38	22
	古	0	24	13	14	16	10	4	19	24	18	7	11	7	8
	不明	100	50	59	74	66	71	74	64	64	68	53	57	55	70
全	須+新	41	35	41	56	43	81	36	21	17	15	52	35	40	26
	古	7	27	12	8	11	9	6	20	26	32	6	11	8	7
計	不明	52	38	47	36	46	10	58	59	57	53	42	54	52	67

須＋新：須恵器＋土師器　古：古式土師器　不明：そのどちらとも判断のつかないもの

表3.　1ピット当土器片の落ち込み数

土器	土色	S							N						
		0	1	2	3	4	5	6	0	1	2	3	4	5	6
須恵器片	AB	0.5	0.1	1.9	2.3	0	1.0	0.2	0.5	0	1.0	5.0	—	—	—
	C	2.0	2.0	3.7	26.0	14.0	2.7	0.3	1.0	0.1	—	—	—	—	—
新土師片	AB	1.5	0.6	1.6	3.3	0	0.4	0	0	0.3	0.2	5.0	—	—	—
	C	0.1	1.2	4.5	18.0	11.0	2.5	0	0.4	0.6	—	—	—	—	—
古式土師片	AB	0	2.0	4.0	1.0	0.5	0.3	0.1	0	0.5	2.0	3.5	0	—	—
	C	0	1.0	0.8	4.0	0	1.5	1.0	0.2	1.0	—	—	—	—	—

特に多い区について　須恵器…3S・4S　新土師器…3S・4S　古式土師器…2S・2N　1S・3N　土色AB　土色C

出し土色　AB：黒色・暗褐色土(71ピット)　C：焼土・木炭混り(41ピット)　(合計 119ピット)

土器についてその出土状況を概観すると、出土層位では古式土師器類は旧表土である黒色土中に包含されていたものが最も多く、新段階の土師器類はピットに伴う比率が高く、須恵器は旧表土上面と前二者のいずれからもほぼ等しく採取した。しかし須恵器の大破片やまとまったものは特定のピットと旧表土上面に密度が高かった。

ここに古段階のものとしての古式土師器と、新段階のものとしての須恵器と土師器について調査区画との関係についてみると須恵器の出土比率の高いのは5S・3S・3N・5N区で、ほぼ3～4区にピークがあり、さらにこれを旧表土上面における密度でみると0N・3N・4～6N・Sで多く、表土が削られていた0S・1N・2Nで特に少ない。

また旧表土中からの検出は3～6S・N区で多く、土層の厚さに比例している。この土層の厚いところは上方から削平によって移動した表土も含むものとみられる。

一方古い時代のものとして古式土師器についてみると、旧表土中又はその上面での検出はともに0～2N区と1S区に多く、これはまた中～小型で黒色土の落ち込むピットの多い区に相当する。

またピットに落ち込んだ土の種類との関係をみると、黒色～黒褐色土の落ち込むピットのうち２Ｓ・１Ｓ区では特に古式土師器片の密度が高く、焼土や木炭細片を含む落ち込み土のピットでは密度が特に低い。これに対し、焼土・木炭の混った土が落ち込むピットは２Ｓ～４Ｓ区に多くあり、須恵器と新しい段階の土師器はほぼこれに同じ３Ｓ・４Ｓ区に多く認められる。特に建物Ⅳに伴う大型柱穴ピットに著しい。

表4.　土器落ち込みの多いピット一覧表

ピット名	落込土色	関係遺構	弥生～古式土師片	区分不明土師片	新土師片	須恵器片
1 S P10	B		8			
2 N P33	B	建 Ⅱ	8			
2 S P 2	B	建 Ⅴ	10			
P14	B		5			
P18	B				5	
P41	B					9
P26	A		10	9	6	
3 N P 3	B		1	22	7	15
P 5	A	墓 壙	12	32	17	101
3 S P 2	A	建 Ⅳ		19	27	19
1 N P37	C			7		
1 S P 9	C	建 Ⅴ	5			5
2 S P 4	C	建 Ⅳ		13	13	7
P 8	C	建 Ⅳ		9	10	14
P23	C	建 Ⅵ		22	22	6
P28	C			6		7
3 S P 5	C			13		7
P12	C	建 Ⅳ		40	63	5
P15	C	建 Ⅳ	13	46	7	45
P19	C	建 Ⅳ		14	44	4
P20	C	建 Ⅳ	13	36	18	142
P21	C		5			
4 S P 6	C	建 Ⅳ		6		13
5 S P 3	C				4	
P10	C			18	5	7
P16	C			5		
0 N P 7	A	溝	5	1		2
1 N M	A	溝	2	3		
2 N M	A	溝	56			
5 N M	A	溝	5	2	14	1

※ 1区分5片以上について資料とした。
※ 土色はA：黒色土
B：暗褐色土
C：焼土・木炭混り

2. 弥生式土器（図15）

（1）～（4）は甕形土器の口縁部片で、いずれも口縁は強く内傾して短く、2～4条の凹線を明瞭にめぐらせる。肩はヨコなでであまり張らないもの（2）や、8～9条の擬描線をめぐらせるもの（1）もある。頸部で強く屈曲するもの（1・3・4）は肩が張り、屈曲の弱いものは胴張りが弱いようだ。内面は口縁部ヨコなで、頸部又は胴部以下は削り放しとし、器壁は薄い。（2）には外面に煤の付着がみられることから煮炊き用の器であったとみられる。いずれも胎土には細砂を多く含んでいる。これらは弥生時代後期前半のものとみられる。

（7）は大型の壺形土器の肩部破片とみられ、砂粒を多く含んだ胎土で焼成は弱い。ヘラ状工具で荒く綾杉文を刻み、内面は削り放しとしている。

（8）～（12）は甕形～壺形土器の底部で明確な平底の類である。底部が比較的薄く、底部径4cm前後のもの（8、9、11）は甕形土器で、底部の厚いもの（10、12）は壺形土器かとみられる。胴下部から底縁へのカーブに変化があり、底部のすぼまる（外反曲線）ようなもの（8、9、11）はすべて甕形土器のものとみられ、これらは一般に古い様相といえよう。壺形土器のもの（10、12）は直線的である。器壁外面はなで仕上げが多いが、磨き（11）やハケ目（12）も認められる。内面は削り放しのままのものが多い。なお（8）

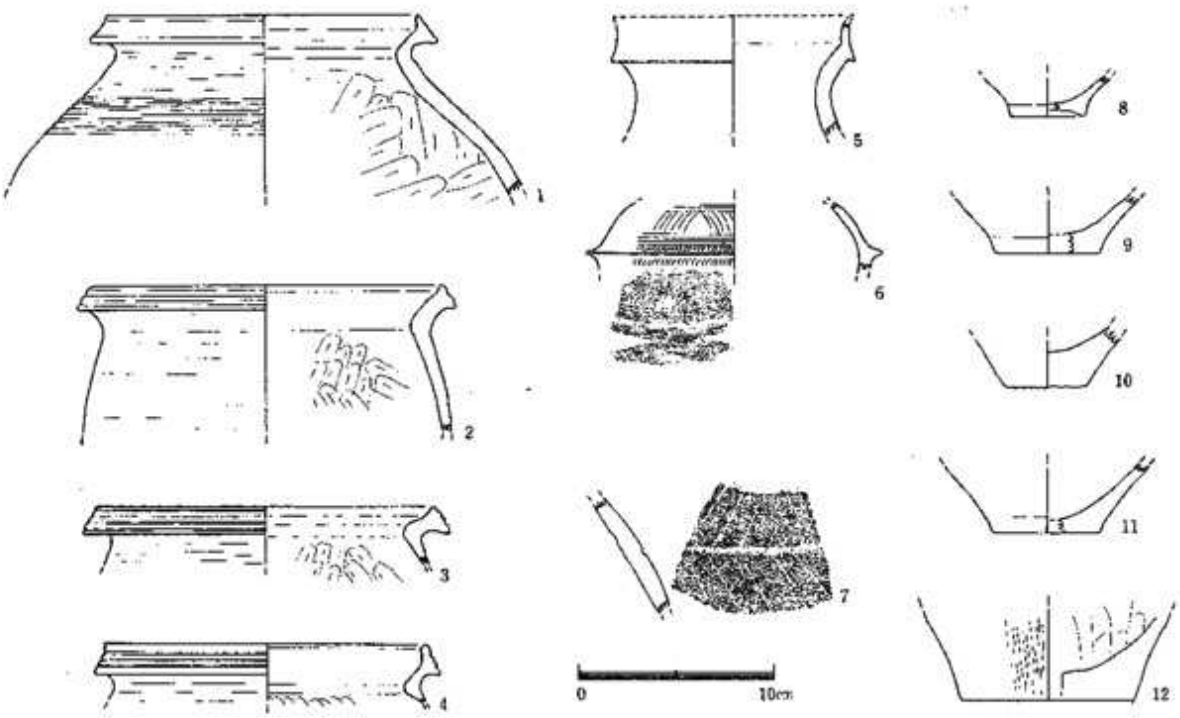


図15. 弥生式土器

は最も小型ではあるが丁寧な造りで底面が凹むものである。これらの底部はすべて弥生時代後期のやや古い様相とみられる。

（5）は甕形土器の複合口縁とは異なり、ほとんど直立しながら口唇は外反しながら尖る。内外面ともに、ヨコなど調整している。頸部は緩くのびておりやや厚手である。壺形土器の口縁を思わせる。焼成はややあまいが、色調はほとんど白色に近く、他の土器片とは全く異なっている。胎土も赤味を帯びた砂粒（おそらく長石か？）や黒雲母片を含むなど特異である。

（6）は強くつぶれた胴部に鋭く尖る凸帯をめぐらす破片で、おそらく2条～3条の凸帯をもつものであろう。凸帯の貼付け部である上下端には爪形の施文があり、これは接合を強めるための施文であろうか。その上方に櫛描4条の工具による二段の平行線の間に弧状の斜行線文をハの字状に施している。胴径は15.2cmを測る。頸～口部や底部の形状は不明である。しかし焼成、色調、胎土に至るまで上記（5）の口縁と全く同一である。とはいっても同一個体とするのは無理があろう。いずれにしても他の土器片とは全く異なったものであることは注目される。凸帯を付け、にぎにぎしく施文した扁平な胴を有する類似例として、例えば岡山県宇岡山土壙墓のいわゆる吉備形特殊壺などが挙げられる。出雲部では的場上壙墓や、西谷弥生墓などにみられ、2～3条の凸帯を有し、小さく高く直立する頸部と強く開いた複合口縁の壺で、通常器台上に置かれる墳墓への供献土器である。出土位置は1N区の黒色土層中であり、土壙等何も認められない位置であり、黒色土中であることから、近い高位置から転移したものと思われる。

甕形～壺形土器片である（1）～（4）（8）～（12）はほぼ弥生時代後期前半ごろのものとみられ、（5）～（7）は大まかに弥生時代終末ごろのものと思われる。特に（6）は吉備形特殊壺であるとみられることから、山陰における数少ない出土遺物の一つとして格別の意味が付加されるものであろう。

このように（1）～（12）は大まかに3世紀代に比定されるものである。

3. 古式土師器（図16、17）

（1）～（23）は複合口縁の甕形土器で、直立に近い口縁の立ち上りを示すものであるが、個々にわずかな差異がある。

口縁の立ち上りが直立して短いもの（1）～（10）、短いがわずかに外反気味のもの（11）～（20）（22）、立ち上りがやや高く外反するもの（21）（23）に分けることができる。

大まかに前者から後者への器形の発展が指摘されており、山陰の古式土師器編年で、ほぼ鍵尾Ⅰ式併行のものといえよう。

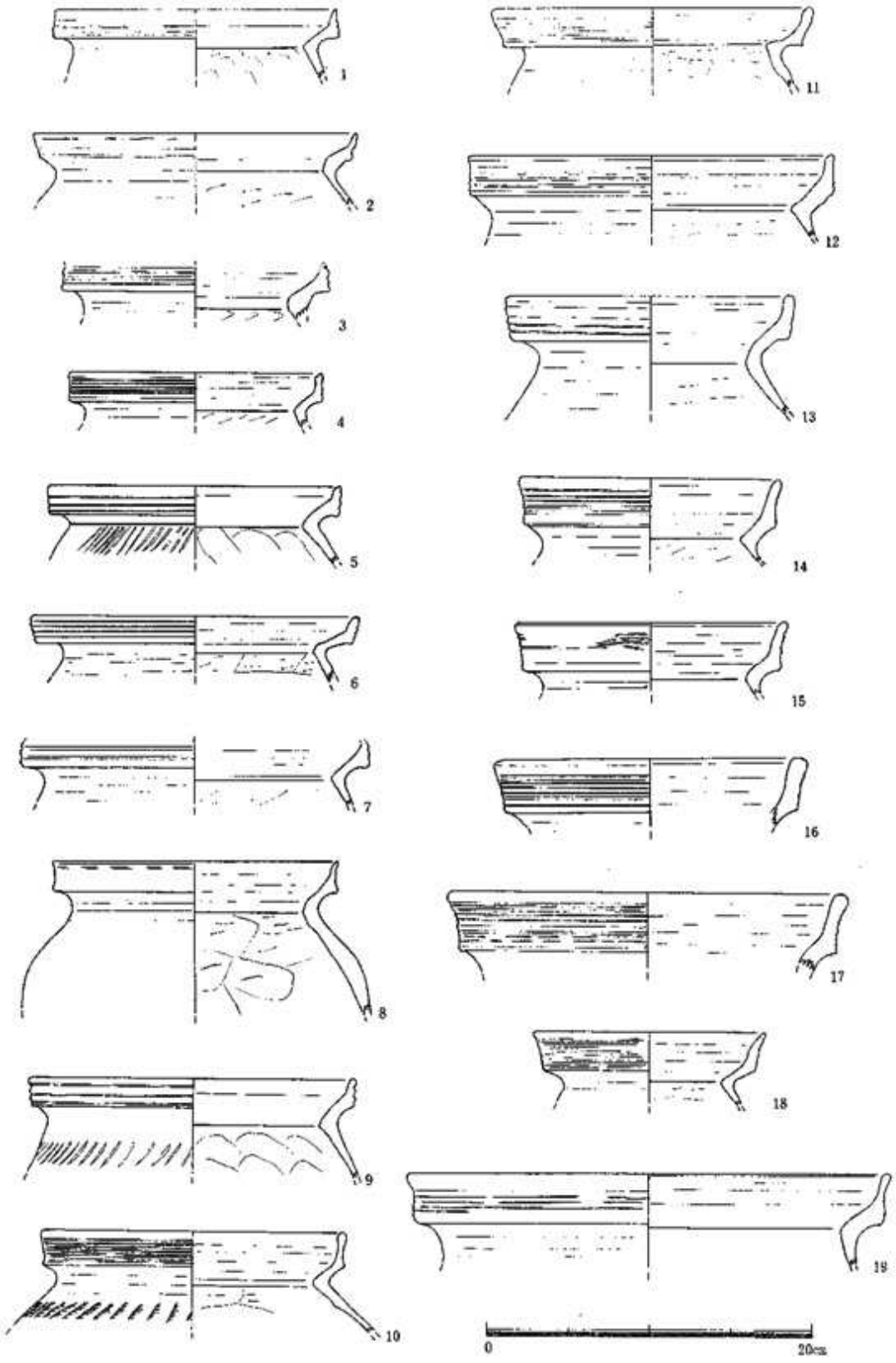


図16. 古式土師器 (1)

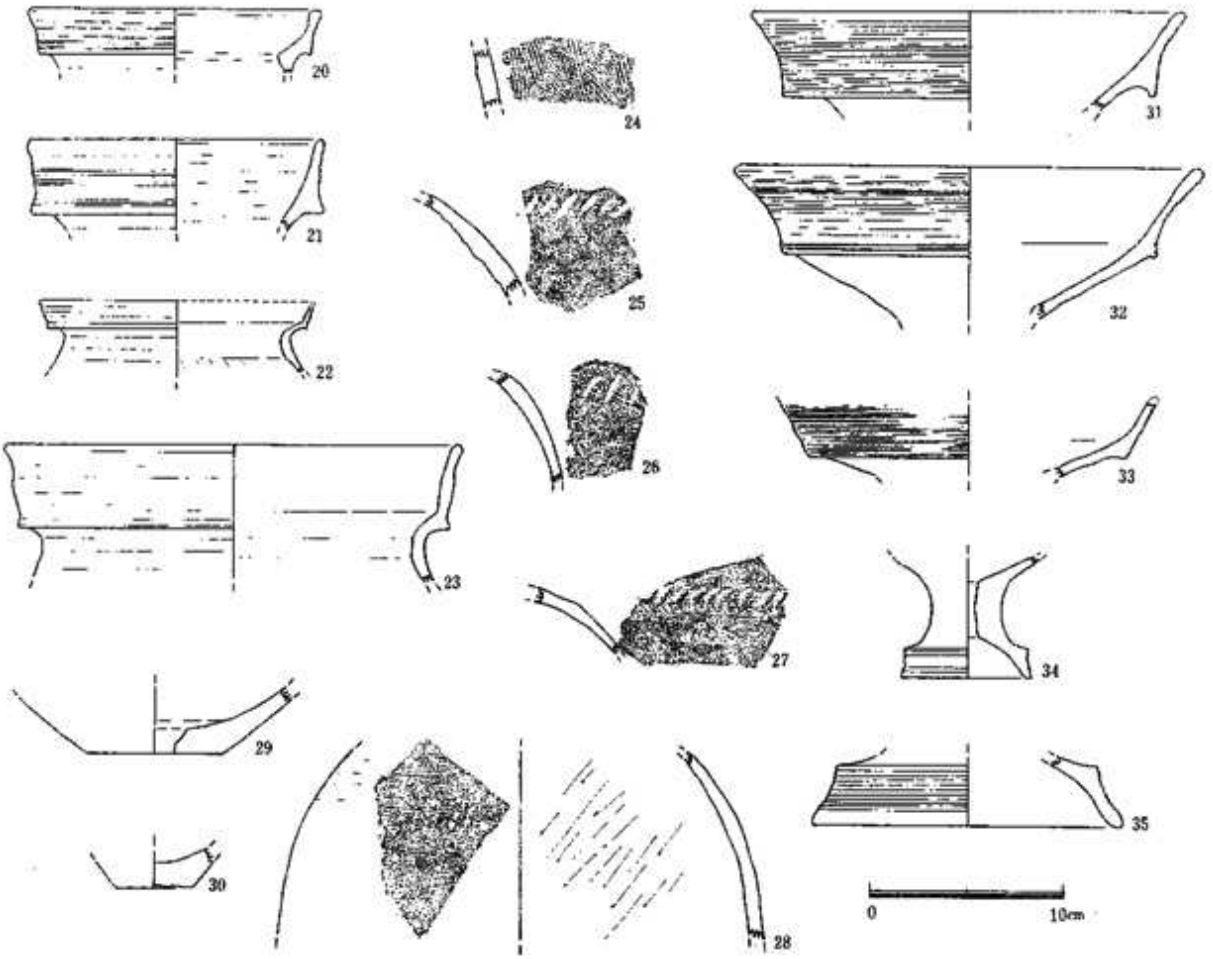


図17. 古式土師器 (2)

これらは口縁外面に櫛描平行沈線をめぐらせ、複合口縁の下端は頸部からのなで上げでやや外方に突き出し気味となり、口縁内側はヨコなでであるが、頸部以下胴部へはヘラによる削り放しであり、胎土には微細砂粒を多く含むなどが共通する特徴的な諸点である。

特に（1）～（7）は口縁の立ち上りが短く、直立又はわずかに内傾気味であること、或は口縁内側にきちんとしたアクセントのあることなどはむしろ弥生式土器の反映が強くみられ、他のものより一段古い様相ともみられ、九重式併行の弥生終末期とみてもよいものである。

また（2）（23）はやや新しく、口縁の櫛描文が後退しており、鍵尾Ⅱ式併行とするのが適当であろう。

（24）～（30）はこれらの甕形土器の肩部（25）～（27）や胴部（24）（28）或は底部（29）（30）である。

（24）（28）はハケ目調整で古相であり、（25）～（27）は肩部に貝殻腹縁でノ字文を押圧施文したもので鍵尾Ⅰ式に主にみられるものであり、（29）（30）の平底もほぼそれに伴う

ものとみられる。

(31) ～ (35) は鉢形器台で、(31) ～ (33) は坏部、(35) は脚部、(34) は極く小型で頸～～脚部である。坏部、脚部ともに複合口縁の形態で、幅広く櫛描沈線を施し、坏部内面は磨き仕上げ、脚部内面は削りのままである。坏部から頸部へのカーブが緩やかで頸部はまだあまりつまっていないとみられることから、ほぼ鍵尾Ⅰ式併行時期の所産とみられる。胎土も同時期の甕形土器と同様に砂粒をかなり含むものである。なお (34) のような小型品は類例が乏しい。

以上にみた (1) ～ (35) の土器は、ほぼ単純に鍵尾Ⅰ式併行を中心とする時期のもので、ほぼ4世紀に比定される。

4. 歴史時代の土師器 (図18)

(1) ～ (6) は単純に短く開く口縁の甕形土器で、やや粗製のものである。このうち (5) (6) は内側が口縁と胴部との界に鋭いアクセントを削り出して造り、平安時代の特徴を示している。これらは内外面ともに荒っぽくヨコなで調整し、胎土には粗砂粒を含む粗選のものであり、小形ほど強くヨコに開く口縁である。

(9) (10) は高坏の脚部で外面に朱泥を塗ったものである。坏部は不明であるが脚端が強く屈曲して開く形状は特徴的でほぼ平安時代のものとみてよかろう。

(13) ～ (20) は皿型土器で、高台の付かないもの (13) ～ (15) と高台付のもの (16) ～ (20) がある。いずれも精選された胎土で内外面に朱泥を塗ったものが多い。この中では (13) のみが底面を削り調整したものでより古相を示す。(14) ～ (19) は底面に糸切り痕が明瞭で後出するものである。高台付のものでは (16) がふんばり強く、しかも高く、より古いものとみられる。

(20) は中世にかけて見られる白瓷質のもので、器形は大きく浅い。これはより新しいものと思われる。

(26) の凝宝珠形のつまみは、ほぼ上記の皿形土器 (或は坏身) に伴うものとみられる。

(7) (8) はかまどの焚口部の破片である。貼り付けた短い凸帯状の庇が特徴的で、古墳時代後期以降永らく用いられた様式である。

(11) (12) は双頭形の土製支脚で、3個を用いて簡易なかまどとして用いたものである。表面は荒く削っている。(12) は脚部の破片で底面の一部に枝条の痕跡が認められる。

(22) ～ (24) は器の把手部分の破片である。(22) (23) は大形の器で釜か甑のいずれかであろう。(24) は器の胴部に斜め方向に付くもののようであるが、小形であることとともに本来の形姿は不明である。

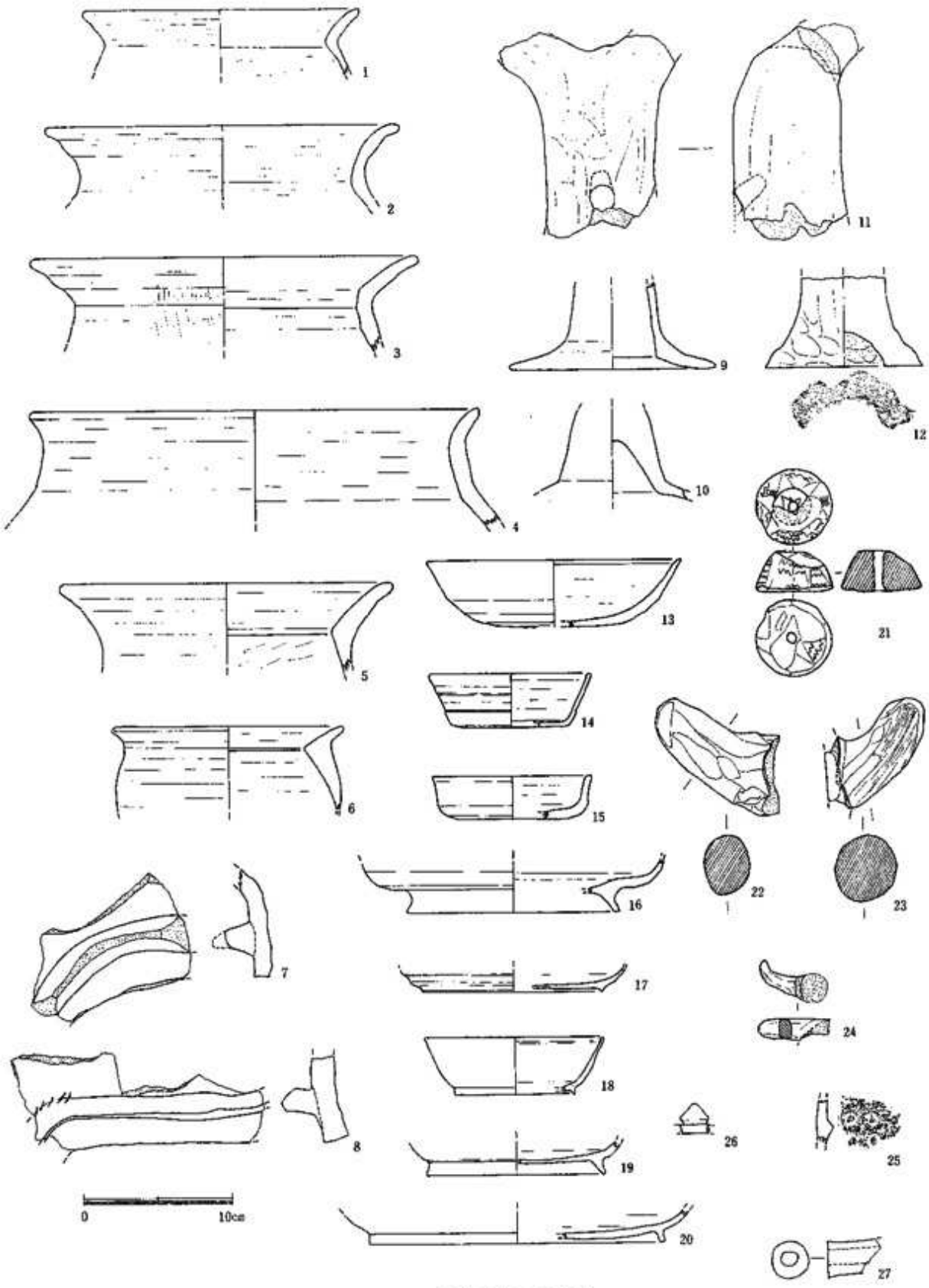


図18. 歴史時代の土師器

(27) は折損した破片で、内径1.0cmの注口の先端部分である。全長や原器種は不明。

(25) は円筒状をなす器の部分のようでおそらく壺頸部の一部分ではなかろうか。にぶい凸帯を貼り付け、その上下の接合部に円形竹管文をめぐらせている。竹管文は直径約4mmを測る。焼成不良で灰褐色を呈し、胎土には微砂粒をわずかに含む。風化が著しく器壁の調整は判らない。時期、器種ともに判然としない。

(21) は紡錘車で灰白色軟質の石製品である。便宜上ここに記す。直径5.1cm、高さ2.7cm截頭円錐形で、上下面及び外周のすべてに鋸歯文を細線で毛彫りしている。中央の孔径はほぼ6～7mmで下端がわずかに広い。この形状と鋸歯文からすると、一般に古墳時代後期からみられるものであるが、本例は明確にその時期を特定することはできない。

以上は土師質製品について概観したが、そのほとんどが平安時代を示唆するものであり、古いとみられるものでも奈良時代、降るものでも中世には至らないものである。石製紡錘車についてもこれらに伴う可能性が大であり、この一群の遺物一括としておよそ9世紀を中心とする限定された時期のものと判断される。

5. 須恵器 (図19、20、21、22)

既述のように須恵器はその多くが黒褐色旧表土の上面又は柱穴ピットに投入された状態で出土した。以下個々についてみる。

(1)～(4) はいずれも蓋坏の坏部である。

(1) は直径16.2cm、器高は推定4cm程度となる。受けの立ち上りは9mmで内傾し、内外面ともに丁寧になで仕上げとしている。胎土もち密で焼きも良くやや灰白色気味で、器表は撥けが多く、自然釉がみられる。やや厚手ではあるが、山陰での編年のⅢ期の新段階に入るものである。なおこのほかにはこれと同時期とみられる遺物はほとんどなかった。

(2) は口径15.3cmで (1) に近い大きさであるが、受け部の立ち上りが低く強く内傾しており (1) より新しいものとみられる。(3) (4) は口径12.4～11.3cmと小型であり、立ち上りも側面からわずかに見える程度にまで低く、短く強く内傾する。(5) はこの時期の蓋の部分である。これらの様相は古墳時代最後の須恵器である。山陰編年のⅣ期の特徴であり奈良時代に入るまでのものとみられる。

(6)～(7) はこれまでの蓋坏の形状が上下逆転して蓋部にかえりとつまみが付く初期のもので、(6) のつまみは輪形であろう。焼きは良く自然釉が付いている。

(8) は極く薄手の口縁部であり、器形は坩であろうか。

(9) は小形壺の下半分でヘラ削りで、平底もヘラ切りの痕が明らかなものである。

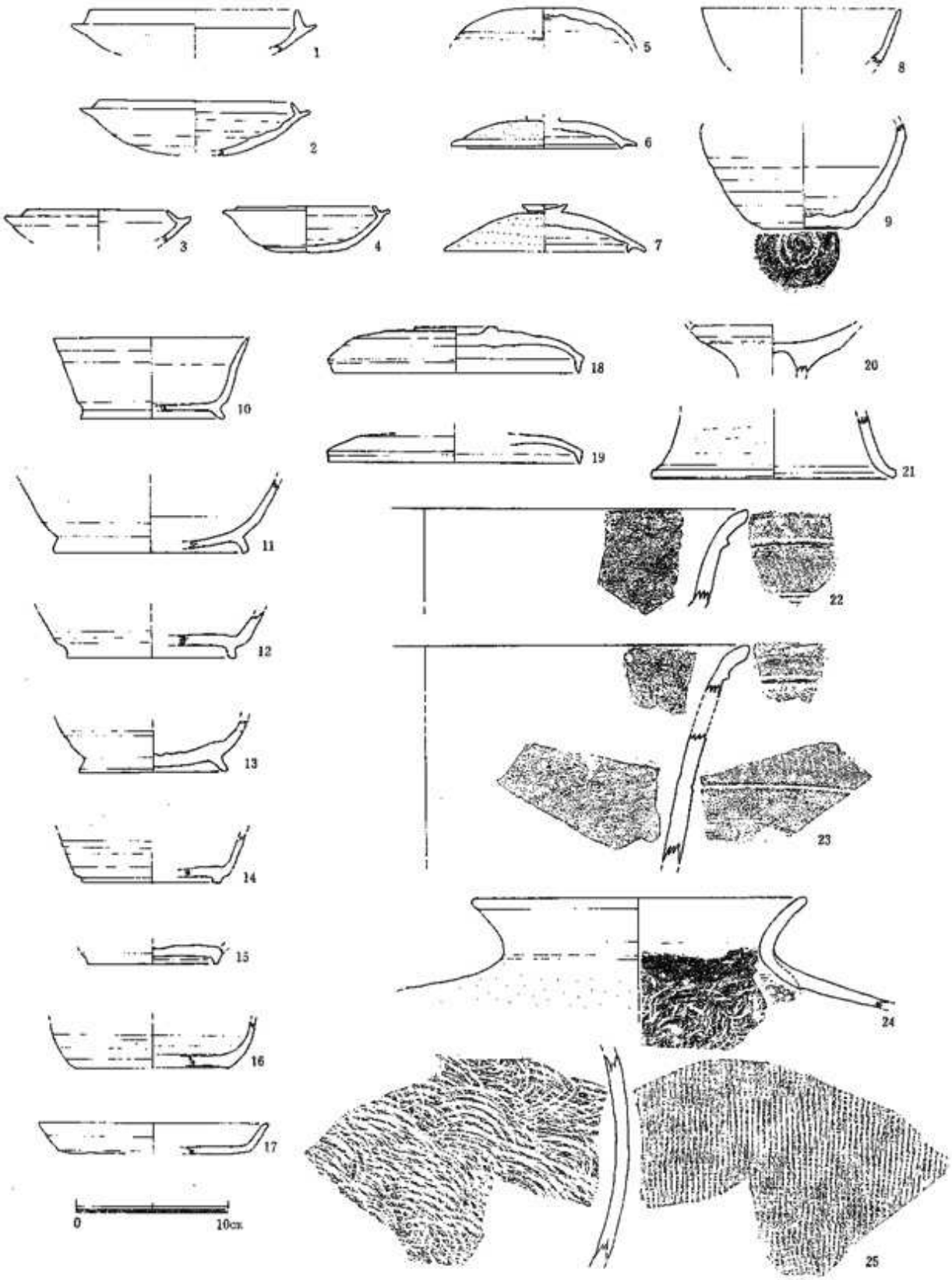


図19. 須 恵 器 (1)

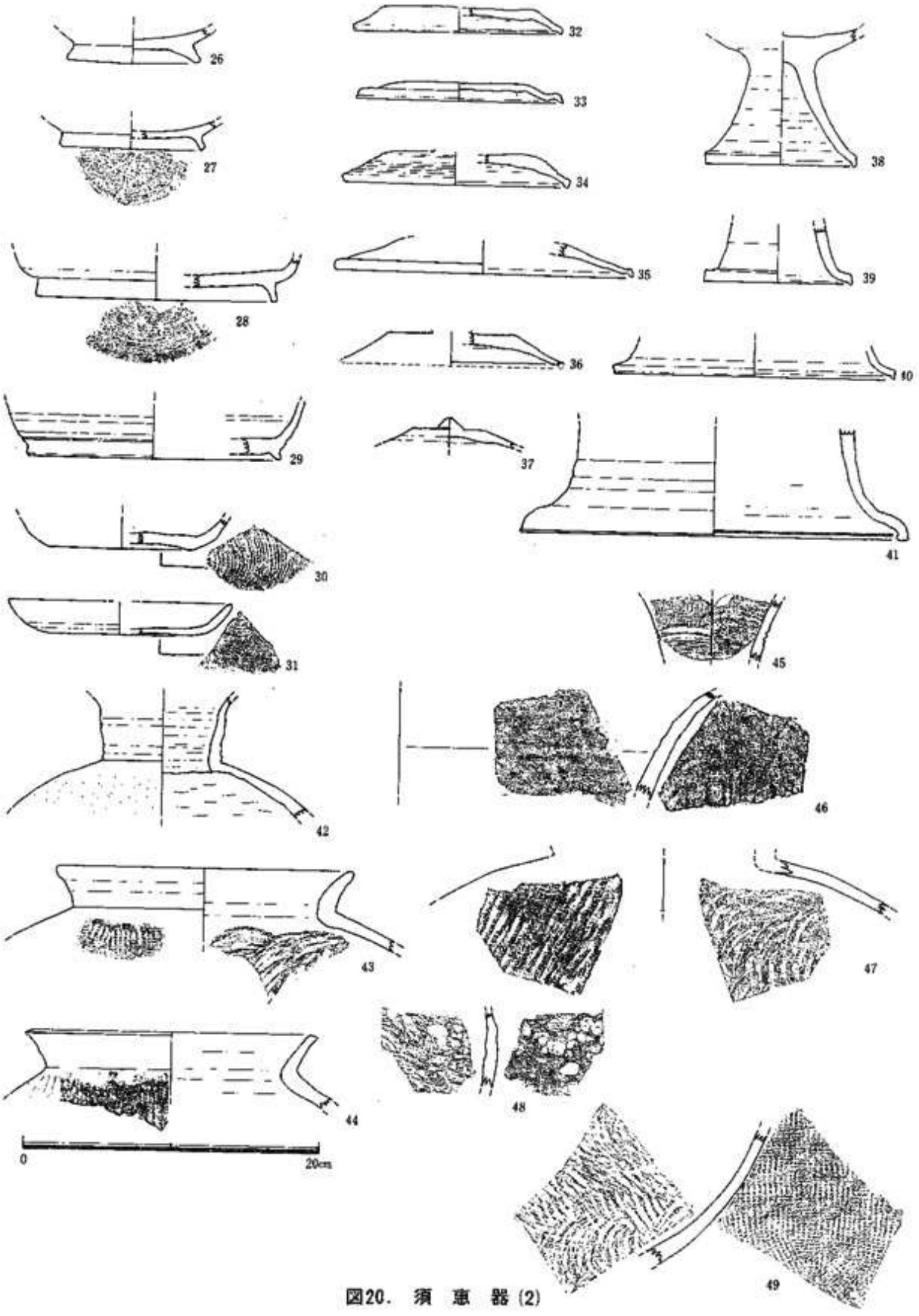

26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
20cm

図20. 須 恵 器 (2)

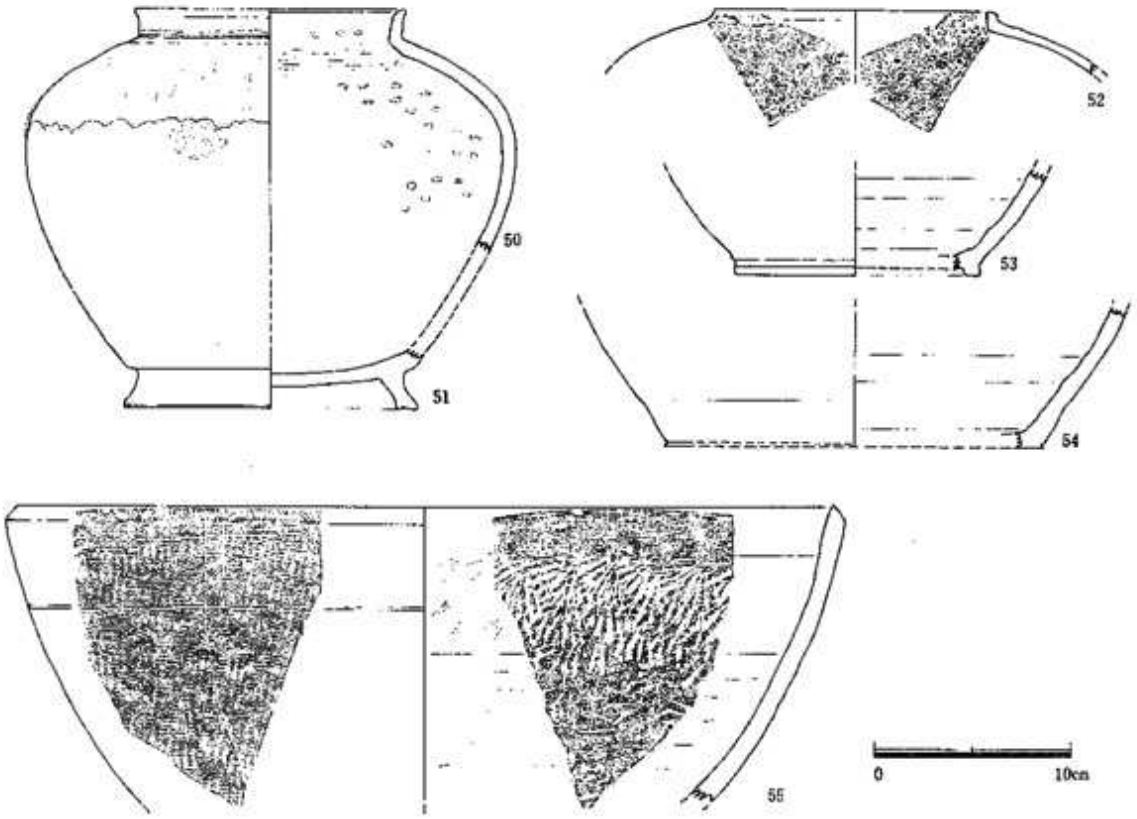


図21. 須 恵 器 (3)

(10) ～ (15) は高台の付く坏で、ロクロ整形し、内外面ともに丁寧になで仕上げとしている。特に (10) ～ (13) の高台は強くふんばる。

(16) (17) は高台の付かない皿形又はそれに近い形の器で、同様に内外全面なで仕上げとしている。

これらに対応する蓋が (18) (19) で、低く大きい輪つまみとなり、やや中のふくらむ形で、端部のかかりは高さもあり明瞭である。甲天井部は回転削り、内面及びかかり部はなで仕上げとなっている。(10) ～ (19) はいずれも灰白色気味の焼き上りで、須恵器本来の完全な還元炎焼成ではなくなっており、8世紀前半ごろのものであろう。

(20) (21) は高坏の破片で、やはり灰白色気味の焼成である。時期も前者にほぼ近いとみられる。

(22) ～ (25) は大形の甕体の破片である。(22) (23) の口縁は大口径のもので高く立ち上って口唇の外反する器形であり、2条の沈線で区切られた施文帯は巾広く櫛描波文が細密に巡らしてある。おそらく2段又は3段に施していたものとみられる。(24) は口径の小さくなった器で、口縁は短く強く〝く〟字状に外反する。肩部には自然釉が強く印目が判然としない。口縁部は内外面ともにヨコなでであるが、胴部内面には円形印目が明瞭であ

り、口頸部は別に造って付ける方法によっているため、接合部は厚くなり内面頸部は叩目がなで消されている。焼成は良い。(25) は胴部の破片で、内外面ともに叩目が明瞭である。これらの時期は (22) (23) がより古相であり、(24) が後出するとみられる。(25) の胴片は前者に近いものとみられる。

(26) ～ (29) は高台付坏で (10) ～ (15) に類似するが高台が薄く低い。また高台裏がなで仕上げでなく回転糸切りである。同様に (30) (31) は高台のないもので (16) (17) の器形であるが底面が回転糸切りである。

(32) ～ (37) はつまみの付く蓋で (18) (19) とほぼ同形のものであるが、天井部を平坦に削ったものである。またかかりが退化して痕跡程度となり、つまみもすべて凝宝珠形であろう。内面はすべてなで仕上げ、(34) の天井外周部は掻き目状、(37) では削り仕上げである。

このように (26) ～ (37) は糸切り底とそれに対応するもので、8世紀の特徴的手法である。

(38) ～ (41) は高坏の脚部片等である。脚には透し孔は認められず、脚端がかかり様の造りで、内外ともに回転なで仕上げである。(41) は特に大形品である。

(42) は壺で口縁端部を欠くが外反するものであろう。胴部内面も回転なで仕上げで、肩部には自然釉が著しい。

(43) (44) は短く強く〝く〟字状に屈曲する口縁で、陶器の祖形的な形状である。胴部の叩き目は (43) は須恵器に共通するがさらに回転掻目文を施し、(44) は叩目の単位が極く荒く特徴的である。

(45) は小形壺の頸部であろう。2条の沈線で区切って上方に掻具の押引きによるスダレ状の施文を行っている。

(46) は大甕の口縁部で、ラフで粗い櫛描波文をめぐらせているが、(22) (23) のような精密さはない。

(47) は甕の肩部で、外面の叩目は (44) と同種であるが同一個体ではない。胴内面は円形叩目文である。

(48) (49) は甕形土器の胴部片で、内面円形叩目文、外面は叩目ののち軽く掻目を全面に施している。これらはすべて不完全な還元焼成で色調が白っぽい傾向がある。

以上 (38) ～ (49) についてはその時期は明確にし難いが、焼成手法等から須恵器の終期ごろのものと考えられ、ほぼ平安時代前半ごろのものであろう。

(50) (51) は同一個体で、須恵質ではあるが木灰を釉薬として塗付し焼いた短頸壺のようで、上肩部に施釉ラインがみられ、この肩部付近と底部内面には緑がかった珪質の釉が

かかり、焼成温度の高いためか特に内面には剥けが著しい。蓋は見当らないが本来蓋の付くものであろう。この素地は青灰色の須恵質であるが明らかに施釉したものであり、灰釉陶器の初原的なものではなかろうか。建物Ⅳに関与するものとして特に注目すべきものである。

(52) はほとんど頸部が認められない壺で、内部調整は少なくとも胴上部まではロクロによる回転なでであり、これまで見てきた須恵器とは製作技法が全く異なる。

(53) (54) も技法は同様で須恵質のものである。ロクロによる引き上げ手法が明瞭なものである。(53) はわずかに高台を付け、(54) は平底である。いずれも壺形土器の底部であろう。

(55) は青味がかった灰色で須恵質の鉢形土器である。或は鉄鉢を模したものであろうか。口縁は外削りとし、外面は須恵器同様の細かい叩目でそのあと回転掻き目を全面にめぐらせている。特異なことは内面の叩目で、やや細かく枝条痕が丁度ヤツデの葉のような形の単位でヨコならびに付けられている。内面全面この叩目であったものが、胴半ばから下方は著しく磨耗している。擂鉢として使用されたものであろう。とすると条線を入れた中世の擂鉢に先行するものとみることができる。墓壙状ピット3N5から出土したものである。

このように (50) ～ (55) は本来の須恵器とはその器形・手法のみならず施釉なども見られるなど、陶器へと変様する時期のものと判断され、およそ平安時代初期あたりの所産とみられる。特に (50) (51) の短頸壺は中央からの搬入を考慮すべき品である。

(56) (57) は超大型の須恵大甕で穀物貯蔵

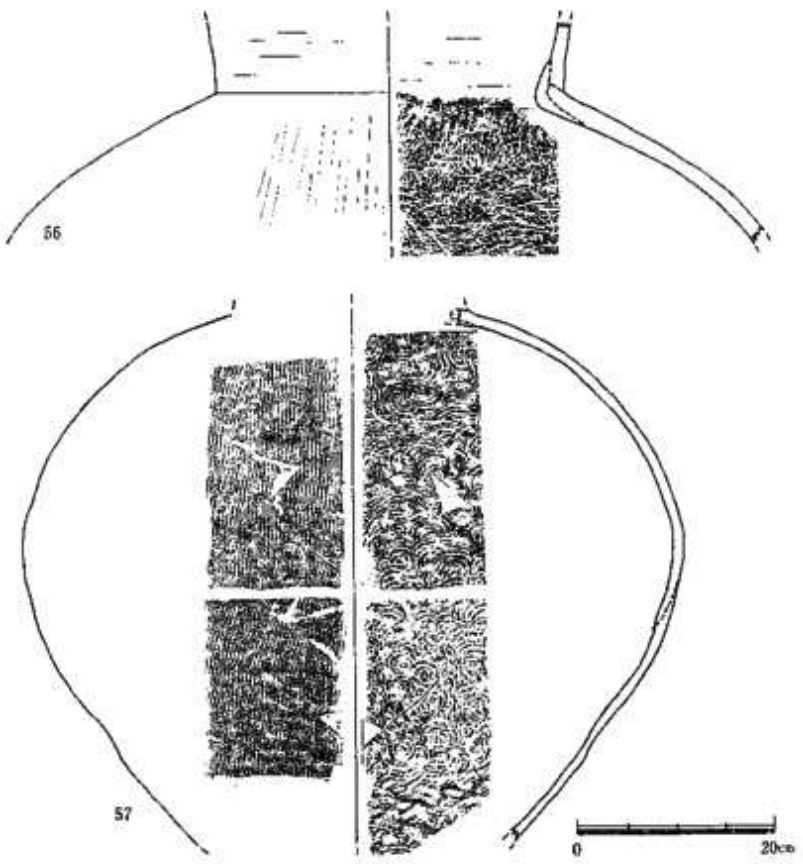


図21. 須 恵 器 (4)

等に用いられたとされるものである。(56) は建物Ⅳの柱穴３Ｓ２に投入されていたもの、(57) は墓壙状ピット３Ｎ５の上面に潰れていたものである。(56) は厚手の器壁で、胴径80cm以上にも達するものとみられ、頸部はヨコなで、胴部は内外叩き目である。破面から頸部接着の様相が知られる。(57) は (56) より薄いが胴径68cmを測り、器高も70cm以上とみられる大形品である。内外面とも叩目で、外面はのち回転掻き目を加える。内面の叩目は胴下半は円形に付いて当て具が全面当てられているが、上半の部分はほぼ半円形の叩目痕で、当て具が上方ほど強く当てられたことが判る。

また胴中央部に器壁の接合部があり製作法が知られる。いずれも青灰色で、壁芯部がわずかに赤味を帯びている。年代は明確でないが、奈良時代ごろのものではなかろうか。

6. 石　　器 (図23)

本遺跡で出土した石器は３点である。

石匙：柱穴ピットに落ち込んだ旧表土中に混在したもの。安山岩質の石材で幅３cm、長さ7.6cm、厚さ5.5mm、つまみのある竪型のものである。山陰では横型の撥形のものが主流で、竪型の例は稀で近くでは島根県三刀屋町宮田遺跡にみられる。大まかに縄文時代後期ごろとみられるもので、刃部は細かく剝いで製作している。

石鏃：石質は安山岩質でややラフな製作である。無茎・扶り入りの型式で当地方に通有のもの。長さ2.05cm、幅1.65cm、厚さ3.3mm、片翼が欠けている。おそらく縄文時代後期から弥生時代前期までのものであろう。

石刃：やや質の硬い安山岩質板状の石材を用い、表裏両面から研いで鋭い刃としたもので、研磨痕が斜方向に認められる。刃はわずかにカーブしており、石包丁か石鎌の破片ではなかろうか。とすると弥生時代かと思われる。厚さ6.5mm、現存幅2.9cm、長さ５cmの残欠である。

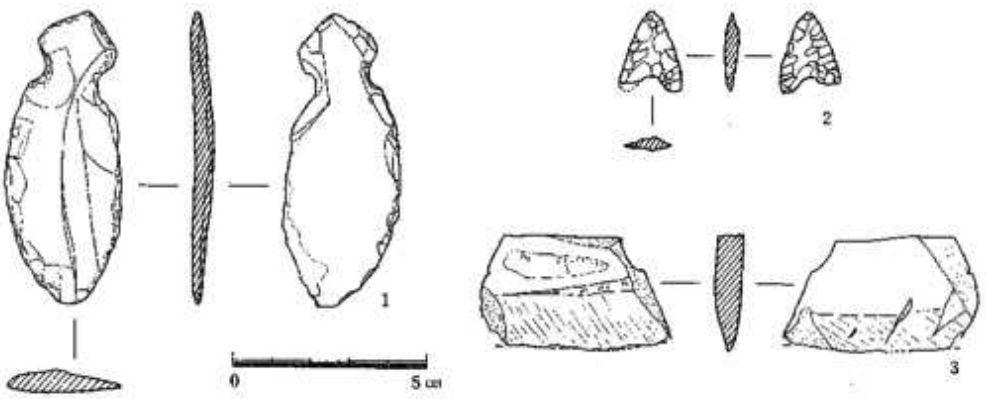


図23. 石　　器

表5. 弥生式土器観察表

番号	出土位置	器種	復元部位	法量 (cm)	焼成	色調	胎土	手法	調整 外面	調整 内面	備考
1	1N黒土	甕	上半分	口径16.6	やや不良	外淡褐 内淡黄褐	ビ細砂多く含む	肩に横線文・口縁短く内傾	口縁ヨコなでのち凹線 以下ヨコなで	口縁ヨコなで 胴削り放し	風化著しい
2	1NP19	〃	肩一口	〃 19.2	〃	暗褐	〃	〃	口縁2条凹線 頸以下ヨコなで	口縁ヨコなで 胴削り放し	外面煤付着
3	4S黒土	〃	口縁	〃 18.8	良	灰褐	細砂多し	〃	口縁4条凹線 頸ヨコなで	口縁ヨコなで 頸削り放し	
4	2S黒土	〃	〃	〃 17.6	〃	暗褐	〃	〃	口縁3条凹線 頸ヨコなで	口縁ヨコなで 胴削り放し	
5	1N黒土	壺?	〃	〃 12.2	並	灰白	石英長石 黒雲母を含む	直立～外反気味	ヨコなで	ヨコなで	同一胎土で他に類似なし
6	1N黒土	特殊壺	胴	胴径15.2	〃	灰白	〃	凸帯を回し爪型文・櫛線文の施文	爪型文凸帯 櫛線文	〃	
7	0S表	大壺	肩	—	やや不良	白橙	砂多し	ヘラ刻み綾杉文	ヘラ刻み施文	ヘラ削り放し	風化著しい
8	5NP2	甕	底	〃 3.8	良	淡赤褐	砂あり	凹み底、尻線外反気味	なで	削り放し	
9	攪乱土中	〃	〃	〃 5.2	やや良	黄橙	粗砂あり	平底、尻線外反気味	なで	〃	
10	?区黒土	壺	〃	〃 4.2	やや不良	明橙	粗砂多し	平底、尻線直線的	なで	指頭削	
11	2N黒土	甕	〃	〃 5.5	やや良	淡黄橙	粗砂あり	平底、尻線外反気味	みがき	なで	
12	2S黒土	大壺	〃	〃 8.8	良	暗褐	〃	大型平底、わずかに尻線外反気味	タテハケ	削り放し	

表6. 古式土師器観察表

点	出土位置	器種・部分	法量(cm)	焼成	色調	胎土の砂	手法 口縁	手法 沈線	手法 口縁下端	手法 その他	調整 外	調整 内
1	3 S トレ	甕 口縁	口径17.4	良好	灰褐	砂粒わずか含む	短く直立	痕跡	くり上げ		なで	胴部削り放し
2	4 S 黒土	〃 〃	〃 19.8	やや不良	〃	細砂多く含む	短くやや外反	痕跡	くり上げ		なで	胴部削り放し
3	6 N 黒土	〃 〃	〃 16.4	良	暗褐	細砂含む	短く直立	あり	くり上げ		なで	胴部削り放し
4	4 S 黒土	〃 〃	〃 15.6	やや不良	〃	細砂やや多く含む	短く直立	あり	くり上げ		なで	胴部削り放し
5	1 N 黒土	〃 〃	〃 18.0	良	淡黄褐	細砂やや多く含む	短く直立	あり	ヨコ出し	口縁文	なで 口縁部斜格目	胴部削り放し
6	4 N 黒土	〃 〃	〃 20.0	〃	〃	細砂やや多く含む	やや短く外反		ヨコ出し		なで	胴部削り放し
7	3 S P 8	〃 〃	〃 21.4	〃	〃	粗砂多し	やや内傾気味	あり	ヨコ出し		なで	胴部削り放し
8	1 S 黒土	〃 〃	〃 17.4	やや不良	〃	粗砂多し	直立	痕跡	ヨコ出し		なで	胴部削り放し
9	5 S 黒土	〃 〃	〃 20.0	〃	明赤褐	粗砂やや多し	短く直立	あり	くり上げ	肩部貝殻腹縁1字文	なで	胴部以下削り放し
10	2 S 黒土	〃 〃	〃 18.8	良	〃	粗砂やや多し	ほぼ直立	7条以上	くり上げ	肩貝殻押圧文	なで	胴部以下削り放し
11	4 N 黒土	〃 〃	〃 19.6	やや不良	暗褐	粗砂多し	短く外傾	7条以上	ヨコ出し		なで	削り放し
12	2 S 黒土	〃 〃	〃 22.2	不良	明赤褐	粗砂多し	直立	6条不明瞭	くり上げ		なで	削り放し
13	4 S 黒土	〃 〃	〃 17.2	やや不良	淡黄褐	粗砂やや多し	やや高く直立気味	不明瞭	ヨコ出し		なで	削り放し
14	6 N 黒土	〃 〃	〃 16.0	良	暗褐	砂やや多し	高くやや外傾	5条沈線	くり上げ		なで	削り放し
15	0 N 黒土	〃 〃	〃 16.6	やや不良	〃	砂やや多し	高くわずかに外反	痕跡	ヨコ出し		なで	削り放し
16	0 N 黒土	底 〃	〃 19.2	〃	赤褐	砂多し	厚く高く外傾	7条	くり上げ		なで	
17	0 N 黒土	〃? 〃	〃 24.4	〃	赤褐	砂多し	厚く高くやや外反	8条	くり上げ		なで	?
18	0 N 黒土	〃 〃	〃 14.1	〃	暗褐	砂やや多し	高く外反	7条	くり上げ		なで	削り放し

19	3 S トレ	壺 口縁	口径29.6	やや不良	淡黄橙	砂多し	大型・薄く直立 口唇外反	5条	くり上げ		なで	?
20	4 S 黒土	甕 〃	〃 15.0	不良	灰褐	砂多し	外反・厚手	5～6条不明瞭	下げ		なで	・・
21	0 N 黒土	壺? 〃	〃 15.4	やや不良	明黄褐	砂含む	高く直立	6条不明瞭	ヨコ出し		なで	・
22	2 N 黒土	甕 〃	〃 14.1	良	淺黄橙	砂あり	短く外反・薄手	条痕不明	下り	外面一部未塗り?	なで	
23	5 N 黒土	〃 〃	〃 23.6	やや不良	明黄褐	砂やや多し	高く外傾気味	なし	ヨコ出し		なで	―
24	3 S P 15	〃 胴片		やや良	鈍赤褐	砂含む					ハケ目 タテのち斜	削り放し
25	1 S 黒土	〃 有部片	・	やや良	灰白	砂含む				肩貝殻復縁 1字文	不明	不明
26	5 N P 2	〃 〃	・	やや不良	暗褐	砂やや多し				肩貝殻復縁 1字文	ハケ目	不明
27	1 S P 31	〃 〃	―	やや良	明赤橙	砂含む				肩貝殻復縁 1字文	なで	不明
28	4 S 黒土	〃 胴部片	胴径24.8	やや不良	暗赤褐	砂やや多し				肩貝殻復縁 1字文	ヨコハケ目	削り放し
29	2 S 黒土	〃 底部	〃 7.0	やや不良	暗赤褐	砂やや多し				大型 丸味平底	不明	不明
30	4 S 黒土	〃 〃	〃 3.7	良	灰褐	砂やや多し				小型 凹底気味	不明	不明
31	攪乱土中	器台受部	〃 22.2	やや不良	黄白	砂多し		24条			なで	磨き
32	0 N 土中	〃 〃	〃 24.0	良	淡赤褐	砂多し		17条			なで	磨き
33	0 N 土中	〃 〃	〃 (22～)	良	灰褐	砂多し		多条		2次穿孔あり	なで	磨き
34	4 N 土中	小型器台脚?	〃 6.7	やや良	黄橙	砂多し		4条痕跡			なで	頸部は扶り抜き
35	1 N 土中	器台 〃 部	〃 16.0	やや不良	淺黄橙	砂含む		10条			なで	削り

表7. 歴史時代の土師器観察表

番号	出土位置	器種	部分	法量 (cm)	焼成	色調	胎土の砂	手法	調整 外面	調整 内面	備考
1	3N黒土	甕	口縁	20.6	やや不良	淡赤褐	多し	単口縁強く屈曲	ヨコなで	削り放し	
2	2NP2	〃	〃	23.8	やや不良	淡黄褐	やや多し	単口縁強く外反	ヨコなで	ヨコなで	
3	5N黒土	〃	〃	26.0	不良	灰褐	やや多し	単口縁強く外反	口 ヨコなで 頸 タテハケ目	削り放し	
4	1S黒土	〃	〃	30.0	不良	灰白	含む	単口縁大型品 ゆるく外反・厚手	ヨコなで	削り放し	
5	3N黒土	〃	〃	22.4	やや不良	灰褐	多し	単口縁外 強く外反 内 く字形に削り出し	ヨコなで	削り放し	
6	3SP19	〃	〃	15.6	やや良	明赤橙	少し	単口縁厚く強く外反 内 く字状削り出し	ヨコなで	削りのちなで	
7	2N黒土	かまど	焚口部		やや良	灰黄褐	含む	焚口部は扶り、庇付	荒くヨコなで	荒く削り	同一個体
8	2N黒土	〃	〃	—	やや良	灰黄褐	含む	焚口部は扶り、庇付	荒くヨコなで	荒く削り	
9	2N黒土	高坏	脚部	13.8	不良	淡赤褐	やや多い	脚端強く開く	ヨコなで？	不明	朱塗り？
10	0N黒土	〃	〃	10—	やや不良	淡赤褐	含む	脚端強く開く	不明	不明	朱塗り？
11	3N黒土	土製支脚	両角・底部を欠く	h 14.0 φ 7.2	良	淡赤橙	やや多し	背面下方に穿孔あり	荒く削り放し		
12	攪乱土中	〃	底部片	径10.4	良	淡赤橙	やや少し	底面扶り込み	荒く指頭押圧	—	
13	5N黒土	坏	完形	17.0	良	淡橙	少し	痕丸底	体 なで 底 回転削り	な で	
14	1NP42	〃	〃	10.8	良	淡橙	少し	平底	体 掻き目 底 回転なで	回転なで	内面朱
15	3N黒土	〃	〃	10.6	やや良	明黄橙	少し	平底	体底 回転なで	回転なで	内面朱

16	3N黒土	大　境	下　半	高台径14.3	良	(朱)	少　し	高台付大型	体底 回転なで	回転なで	内外面朱
17	3SP2	境	下　半	高台径12.0	良	淡　橙	少　し	うすい高台付	体底 回転なで	回転なで	
18	3SP2	〃	完　形	口径12.0	良	淡黄橙	少　し	うすい高台付	体底 回転なで	回転なで	
19	5NP5	〃	下　半	高台径12.0	良	淡橙(朱)	少　し	高台付	体底 回転なで	回転なで	内外面朱
20	6N表	大　盤	下　半	高台径20.0	やや不良	白	含　む		体底 回転なで	回転なで	
21	3NP5	紡錘車	ほぼ完形	径 5.1 高 2.7	――	白	――	外面全面に鋸歯文を施す			石製品
22	6S黒土	?	把　手	3.1×3.9 h 8.2	やや不良	暗赤褐	やや多い		指による削り		
23	0N黒土	?	把　手	3.4×4.1 h 7.6	やや不良	淡灰褐	やや多い		指頭削りのちハケ目		
24	撹乱土中	?	把　手(小)	径1.3×0.9 長3.5	やや不良	黄　橙	含　む		手　捏ね		円形に偏心に付けられたもの
25	1N表	?	胴?	?	不　良	灰赤褐	少　し	内帯の下に円形竹管文を施す	不　明	不　明	
26	表　採	?	蓋つまみ片	頂径 2.0	やや不良	白	少　し	擬宝珠形	みがき?	孔は抉りか?	
27	3NP5	?	注　口　片	口径 2.5	やや良	淡黄橙	含　む		な　で		

V. むすび

この庭反Ⅱ遺跡はかつての神西湖の南岸にあたる台地の突端に位置し、奈良時代以降今日に至るまで山陰道の街道として石見への通路にあたっている。古代滑狭郷のほぼ中心的位置にもあたり、古くから開けた土地柄であり、遺跡の密集する地帯である。

この遺跡は調査の結果、隣接する常楽寺遺跡、庭反遺跡と一連のものであり、広く一帯を範囲とするもののようである。調査地点はその北端にあたり、中心部分はさらに南方高位あたりとみられる。

昭和60年度に行った調査の結果、水田土とその下の盛土を除いた旧表土とその下に遺物遺構があり、重複する多数の柱穴群とその上を覆う旧表土中から土器片等を多数検出した。

柱穴群から掘立建物Ⅰ～Ⅴの5棟を確認し、その柱穴の埋土によって建物の時代をⅡ→Ⅲ→Ⅰ→Ⅳ・Ⅴと判断した。

Ⅱ号棟は柱穴に旧表土が落ち込み、古式土師器を単一に含むのみであり、Ⅲ号棟は遺物を全く伴わないがⅡに近い埋土である。Ⅰ号棟も柱穴落ち込み土は旧表土のみであるが、若干の土師器や須恵器片が認められるものの、地表に近い位置で検出したものであることによる。Ⅳ・Ⅴ号棟は全く異なり、焼土の混った埋土で、特にⅣ号の柱穴は大型埋め立てで、のち人為的に埋められており、奈良～平安時代のまとまった個体を投入していることから、これが最も新しいものと判断した。

建物についてみると、Ⅳを除く他はいずれも通有の民家様のものであるが、Ⅳ号棟はその規模と柱の建て方、束柱の存在など民家のそれとは異なるもので、むしろ官衙や寺院等に関与する高床建物であったとみられる。

Ⅱ・Ⅲ号棟は遺物からしておよそ古墳時代前半ごろであり、竪穴式住居跡でない点が注目される。Ⅳ・Ⅴ号棟は平安時代に入るものと考えられる。

墓壙状ピットはおそらく素掘りの土壙で遺物から平安時代のものとみてよかろう。

多数の遺物はここが居住区域であったことを示唆するもので、およそ次のように2期に区分し得る。

先ず、弥生時代後期～古墳時代前期と、古墳時代終末期～平安時代前半期で、特に後者では奈良時代に中心があるようだ。

また特に須恵系の灰を施釉した壺は中央からの搬入品とみられ注目すべき品である。

このほか縄文時代とみられる石器も検出している。

調査区域についてはこのようであるが、付近にはさらに中世的な地名や城砦も存在し、この遺跡からさらにこれらへと発展するものとみられ、未知の遺跡遺構も付近に散在する

ものと思われる。

参考文献

『広江・浜遺跡』　倉敷市教委　1979

「岡山県羊岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報3』　1967

『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ』　島根県教委　S60

『三彩緑釉灰釉』　樽崎彰一　陶磁大系5　平凡社　S49

『須恵器』　中村　浩　ニューサイエンス社　S57

『陶磁』原始古代編　龍淳一郎　日本の美術№235　至文堂　S60

『出雲の国』　東森、池田　学生社　S48

「出雲地方に於ける歴史時代須恵器の編年試論」　柳浦俊一『松江考古第3号』　1980

「狐谷横穴群」　横山純夫『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』　S52

『陶　　邑』　大阪府教育委員会　1979

『出雲国風土記参究』　加藤義成　今井書店　S56

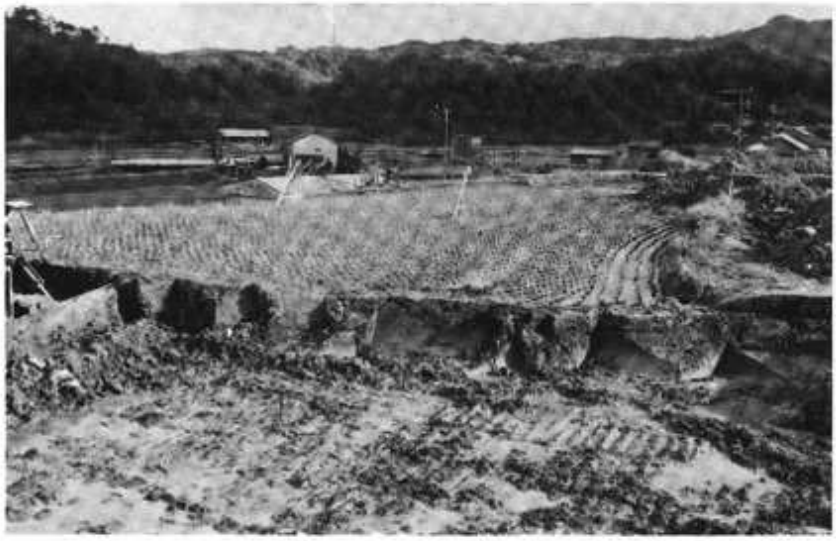
『湖陵町誌』　湖陵町　S45

「常楽寺遺跡発掘調査概要」（稿本）　卜部吉博　1981

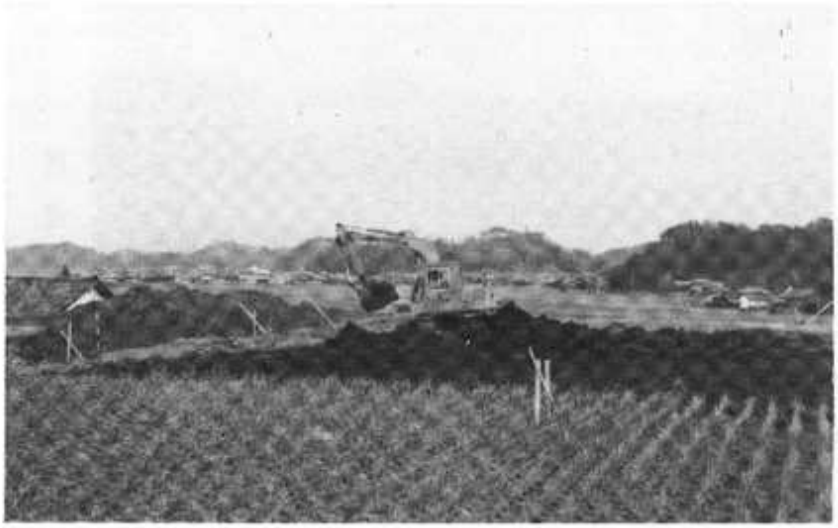
遺跡遠景（北より）

近景（南より）

近景（南西より）

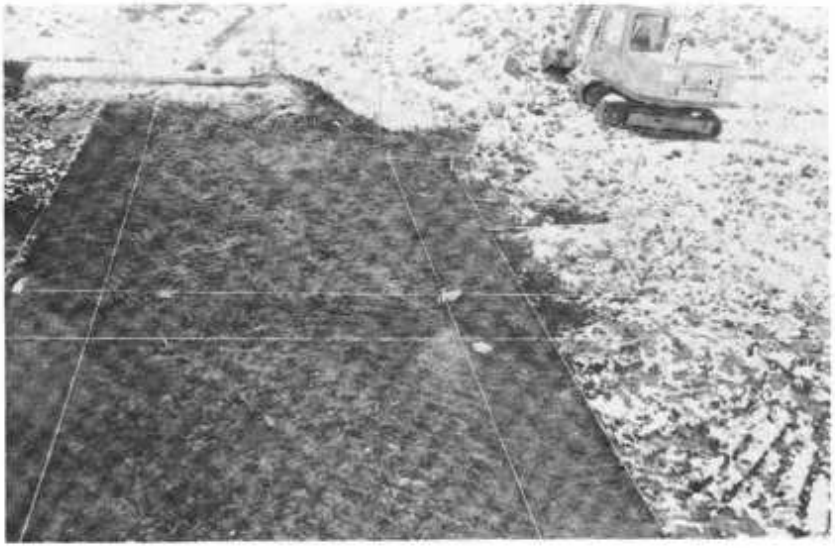


調査前近景（西より）



耕土排除作業

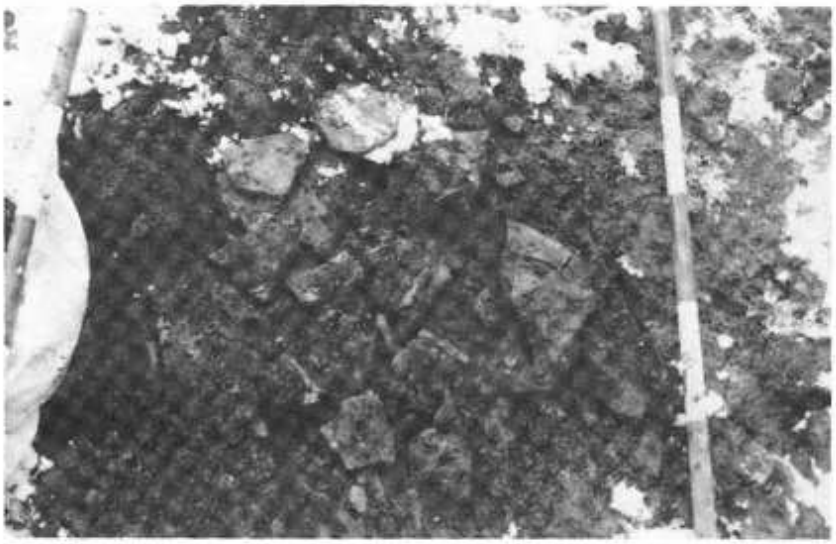
測量作業



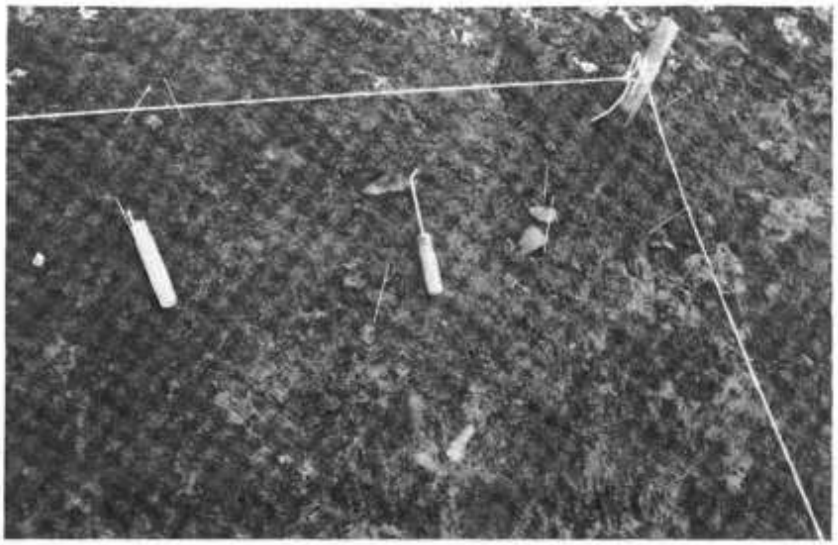
トレンチ設定

トレンチ掘り　作業風景

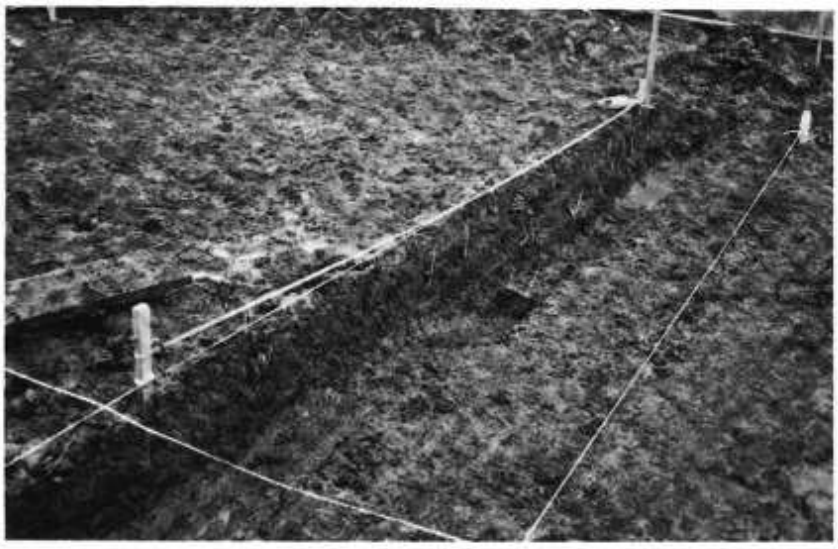
トレンチ掘り　作業風景



土器散布状況（3NP5上面）

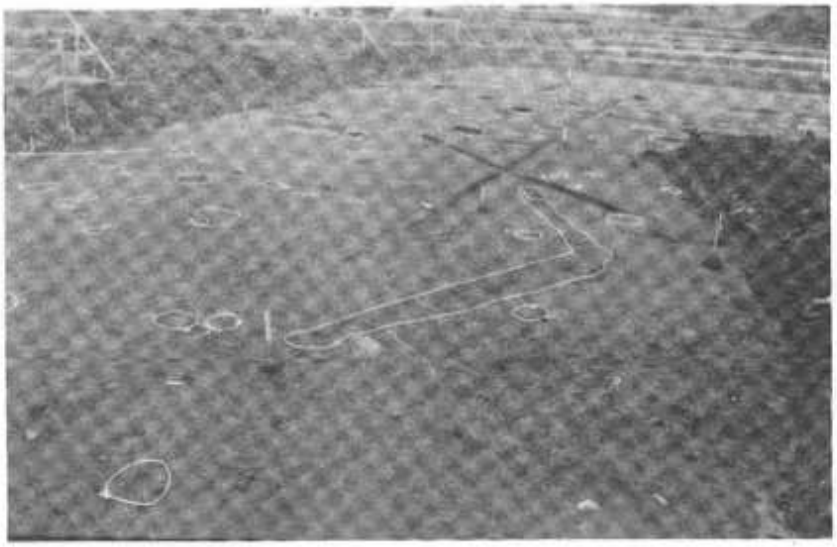


土器散布状況（4Sトレンチ上面）



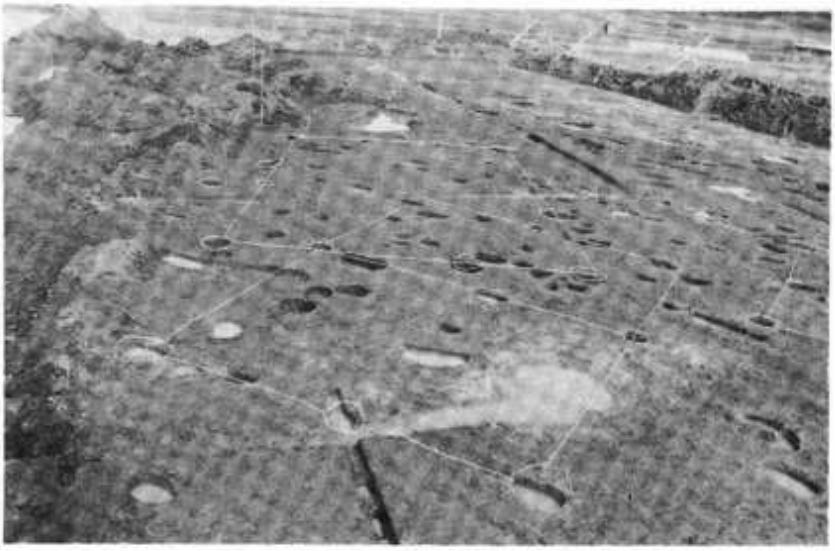
土器散布状況（6Cトレンチ）

ピット状落ち込み検出



ピット状落ち込み検出

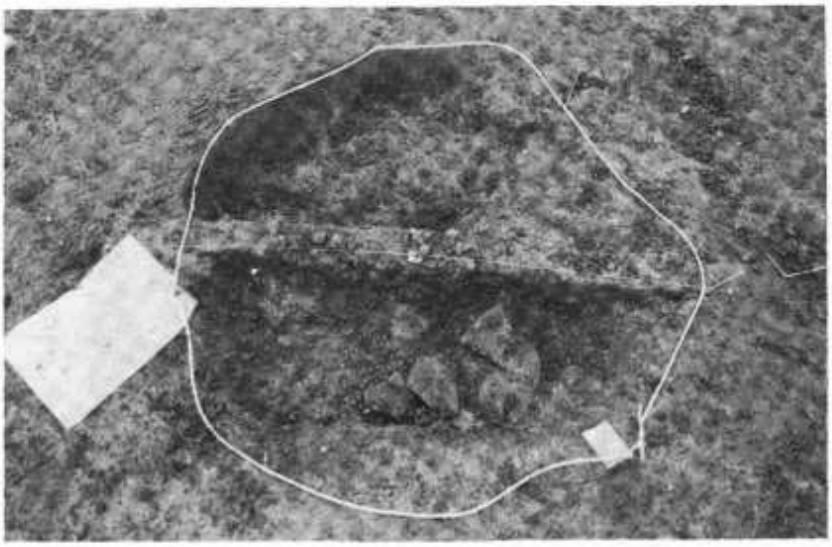
雪中作業風景



建物Ⅰ・Ⅱプラン

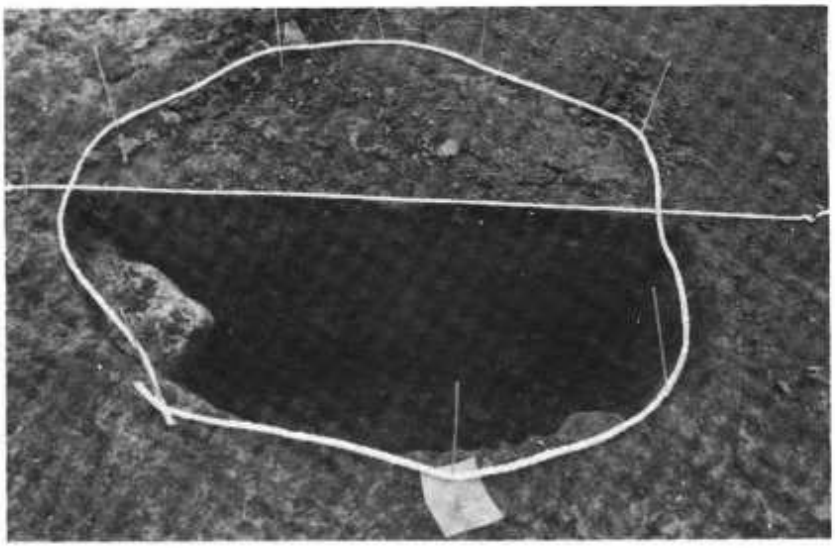
建物Ⅲ・Ⅴプラン

建物Ⅳプラン



建物Ⅳ柱穴（2SP8）

建物Ⅳ柱穴（3SP8）



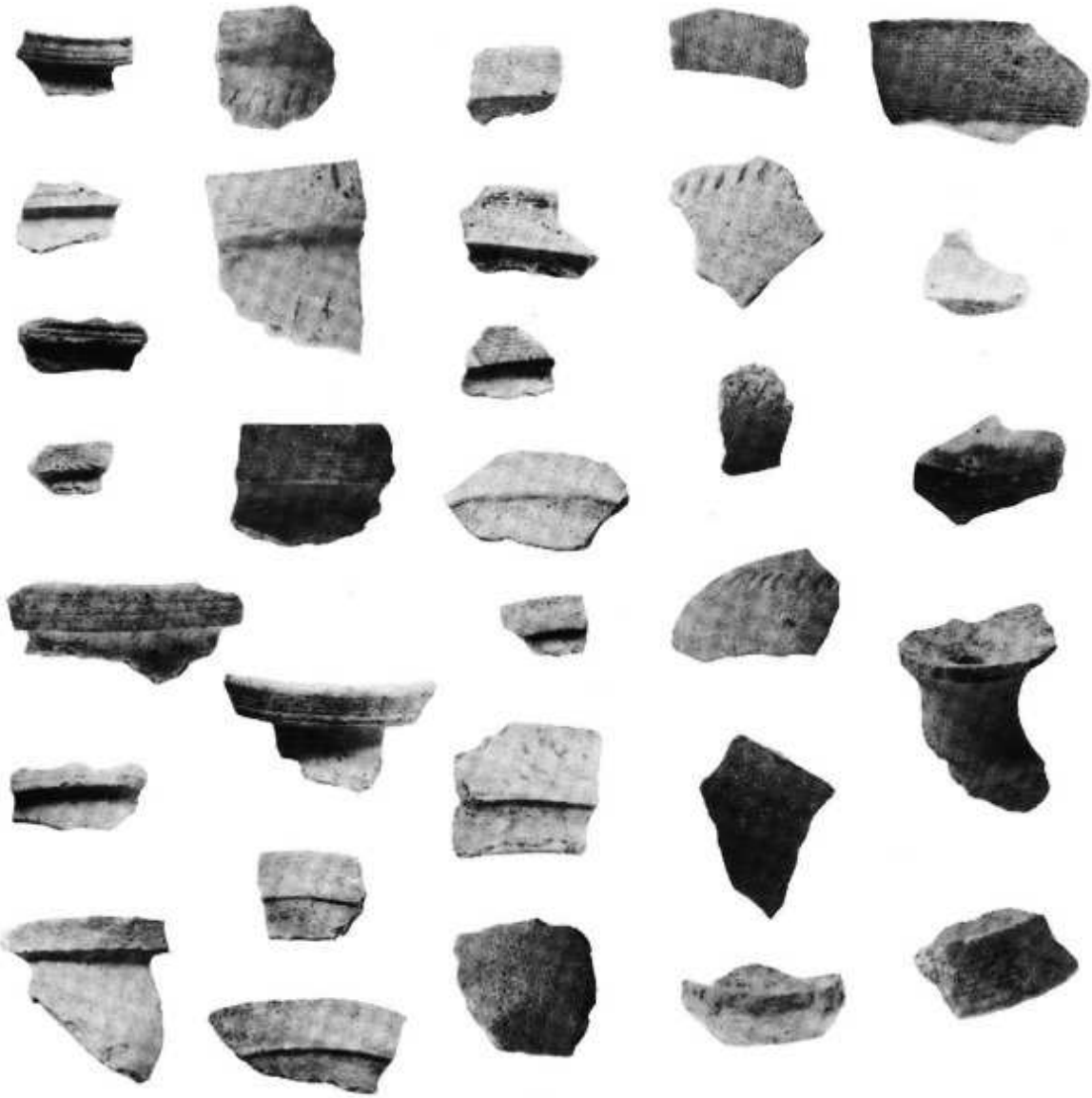
建物Ⅳ柱穴（3SP8）

土壙（3NP5）

遺物整理

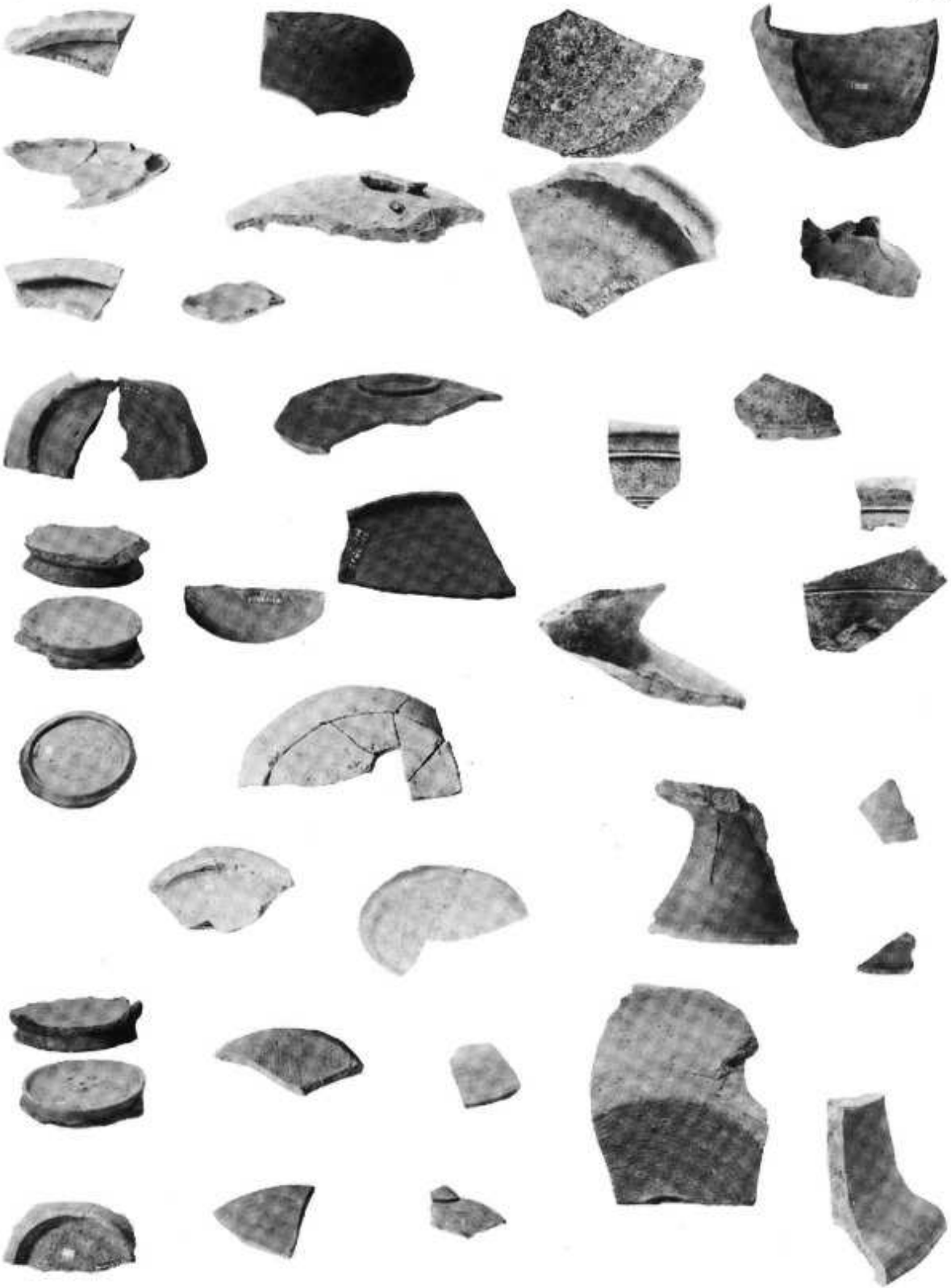
同上

弥 生 式 土 器



古 式 土 師 器

歴史時代の土師質土器



須　恵　器

須　恵　器

石　器

庭反Ⅱ遺跡
―昭和60年度緊急発掘調査報告書―

昭和61年3月
発行　湖陵町教育委員会
島根県簸川郡湖陵町
印刷　㈲木次印刷